

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

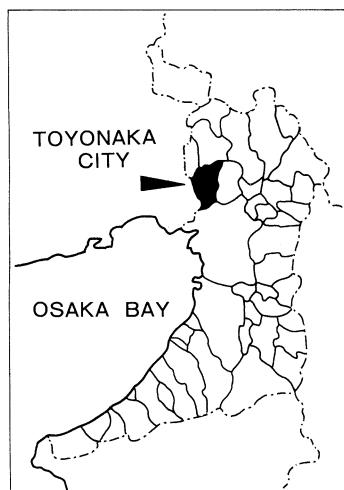
1992(平成4)年度

1993(平成5)年3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1992(平成4)年度



1993(平成5)年3月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は大阪府北西部、千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野に位置しております。太古より開発の好地として多くの人々が生活を営み、そして数多くの文化財を育んでまいりました。これら文化財の中には、地上にあってわたしたちと共に生活の中で生きるものもあれば、人知れず地下に眠るものもあります。この報告書で調査の概要が報告されます螢池北遺跡、麻田藩陣屋跡、新免遺跡、桜塚古墳群、金寺山廃寺も、豊中の地中に眠っていた大切な文化財の一部であります。

戦後、豊中は大阪のベットタウンとして、また交通の要衝として戦前の風景からは予想できない程の変貌を遂げて、今日に至りました。そして、これからも変わりゆくものと予想されます。このような中で、ここで報告されます調査の成果が、豊中の歴史、風土を見なおし、あらためて豊中の未来を考えてゆく手掛かりになりますことを切に希望します。

この報告書は、平成4年度事業として国ならびに大阪府の補助をうけ、豊中市が実施した埋蔵文化財調査の概要報告であります。調査の実施にあたっては、諸先生方よりご指導を賜り、また土地所有者、近隣の方々には文化財の重要性をご理解いただき多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が一層推進できることに、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月31日

豊中市教育委員会  
教育長 青木 伊織

## 例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が平成4年度国庫補助事業（総額4,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急調査報告書である。
2. 本年度の調査は、麻田藩陣屋跡、桜塚古墳群、新免遺跡、螢池北遺跡、金寺山廃寺について実施した。平成4年4月2日から平成5年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行った。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に記すとおりである。  
なお、金寺山廃寺を除く他の調査は営利事業と共有しているため、延面積から個人が占有する面積を按分し、調査費用を負担した。
4. 本書の執筆、編集はそれぞれの担当者が行い、全体の編集は橋田正徳が行った。
5. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護についてご理解いただきまして、深く感謝いたします。

遺跡名	調査地	調査面積	担当者	調査期間
麻田藩陣屋跡 5次	螢池中町3丁目32-3	26m <sup>2</sup>	橋田正徳	平成4年4月2日～4月14日
桜塚古墳群 4次	南桜塚3丁目128-1・2	156m <sup>2</sup>	橋田正徳	平成4年4月15日～5月16日
新免遺跡 42次	玉井町2丁目34	54m <sup>2</sup>	清水 篤	平成4年5月11日～5月27日
螢池北遺跡 16次	螢池北町1丁目115-1・2 110-1	122m <sup>2</sup>	橋田正徳	平成4年9月16日～10月13日
金寺山廃寺 (試掘調査) 4次	本町8丁目31・31-1・2	222m <sup>2</sup>	柳本照男	平成4年12月1日～12月17日

# 目 次

## 第Ⅰ章 位置と環境

## 第Ⅱ章 麻田藩陣屋跡第5次調査の概要

1. 調査の経緯.....	3
2. 調査の概要	
(1) 基本層序.....	3
(2) 検出した遺構と出土遺物.....	4
(3) まとめ.....	6

## 第Ⅲ章 桜塚古墳群第4次調査の概要

1. 調査の経緯.....	7
2. 調査の概要	
(1) 基本層序.....	9
(2) 検出した遺構と出土遺物.....	9
(3) まとめ.....	14

## 第Ⅳ章 新免遺跡第42次調査の概要

1. 調査の経緯.....	15
2. 調査の概要	
(1) 基本層序.....	15
(2) 検出した遺構と出土遺物.....	16
(3) まとめ.....	22

## 第Ⅴ章 萤池北遺跡第16次調査の概要

1. 調査の経緯.....	23
2. 調査の概要	
(1) 基本層序.....	24
(2) 検出した遺構と出土遺物.....	24

(3)まとめ	28
--------	----

## 第VI章 金寺山廃寺第4次試掘調査の概要

1. 調査の経緯	29
2. 既往の調査	29
3. 試掘調査の概要	
(1) 基本層序	31
(2) 検出遺構	31
(3) 出土遺物	34
4. まとめ	35

## 図版目次

図版1 麻田藩陣屋跡第5次調査地	(1) 調査前風景 (2) 調査区全景
図版2 麻田藩陣屋跡第5次調査地	(1) ピット1土層断面 (2) 河川土層断面
図版3 桜塚古墳群第4次調査地	(1) 調査前風景 (2) 調査区全景
図版4 桜塚古墳群第4次調査地	(1) 周濠1埴輪出土状況 (2) 周濠1全景
図版5 桜塚古墳群第4次調査地	(1) 周濠2埴輪出土状況 (2) 周濠2全景
図版6 桜塚古墳群第4次調査地出土遺物	(1) 周濠1出土朝顔形埴輪 (2) 周濠2出土円筒形埴輪
図版7 新免遺跡第42次調査地	(1) ピット5断面(西から) (2) 土坑2遺物出土状況全景(東から)
図版8 新免遺跡第42次調査地	(1) 土坑2遺物出土状況近景(東から) (2) 遺構完掘状況全景(北から)
図版9 新免遺跡第42次調査地出土遺物	
図版10 新免遺跡第42次調査地出土遺物	

- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 図版11 萤池北遺跡第16次調査地    | (1) 調査前風景             |
|                      | (2) 調査区全景             |
| 図版12 萤池北遺跡第16次調査地    | (1) 住居1全景             |
|                      | (2) 土坑1土器出土状況         |
| 図版13 金寺山廃寺第4次調査地     | (1) 試掘調査の状況(第1・2トレンチ) |
|                      | (2) 試掘調査の状況(第2・3トレンチ) |
| 図版14 金寺山廃寺第4次調査地     | (1) 第1トレンチ遺構検出状況      |
|                      | (2) 第3トレンチ遺構検出状況      |
| 図版15 金寺山廃寺第4次調査地出土遺物 | (1) 瓦類                |
|                      | (2) 鏟                 |

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布図	2
第2図 調査地範囲図	3
第3図 調査地位置図	3
第4図 調査区平面図	4
第5図 ピット1平面・断面図	5
第6図 河川土層断面図	5
第7図 河川出土遺物	6
第8図 調査地位置図	7
第9図 調査区平面図	8
第10図 周濠内埴輪片分布図	9
第11図 調査地範囲図	9
第12図 周濠1埴輪出土状況図	10
第13図 周濠1出土朝顔形埴輪	11
第14図 周濠1・周濠2土層断面図	12
第15図 周濠2出土遺物	13
第16図 調査地範囲図	15
第17図 調査地位置図	15
第18図 調査区平面図	16
第19図 土坑2遺物出土状況図	17
第20図 土坑2出土遺物(1)	18

第21図 土坑2出土遺物(2) .....	19
第22図 土坑2出土遺物(3) .....	20
第23図 土坑2出土遺物(4) .....	21
第24図 調査地範囲図.....	23
第25図 調査地位置図.....	23
第26図 住居1平面図.....	24
第27図 調査区平面図(折り込み) .....	25～26
第28図 土坑1平面・断面・立面図.....	27
第29図 土坑1出土遺物.....	28
第30図 調査地位置図.....	29
第31図 金寺山廃寺塔心礎.....	30
第32図 金寺山廃寺付近地籍図.....	30
第33図 金寺山廃寺第1次調査.....	30
第34図 金寺山廃寺第2次調査.....	31
第35図 金寺山廃寺第3次調査.....	31
第36図 堆積土の状況.....	31
第37図 試掘調査範囲図.....	32
第38図 第1トレンチ北壁断面図.....	33
第39図 第1トレンチ遺構検出状況.....	34
第40図 第3トレンチ平面・断面図.....	34
第41図 出土遺物.....	35
第42図 金寺山廃寺出土瓦.....	36

## 第Ⅰ章 位置と環境

**位置** 豊中市は大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県と接する。豊中市の地形を概観すると、北部には待兼山、島熊山等からなる千里丘陵が、その南西すなわち中央部には低・中位段丘からなる豊中台地が、そして西部から南部にかけては沖積平野が広がる。

今回報告する遺跡のうち、蛍池北遺跡と麻田藩陣屋跡は千里丘陵中位段丘上に、また新免遺跡、金寺山廃寺、桜塚古墳群は豊中台地低・中位段丘上に位置する。

**歴史的環境** 豊中市における人間の活動の始まりは旧石器時代まで遡るが、弥生時代にいたるまでの状況を知る資料は千里川流域の諸遺跡に集中する。

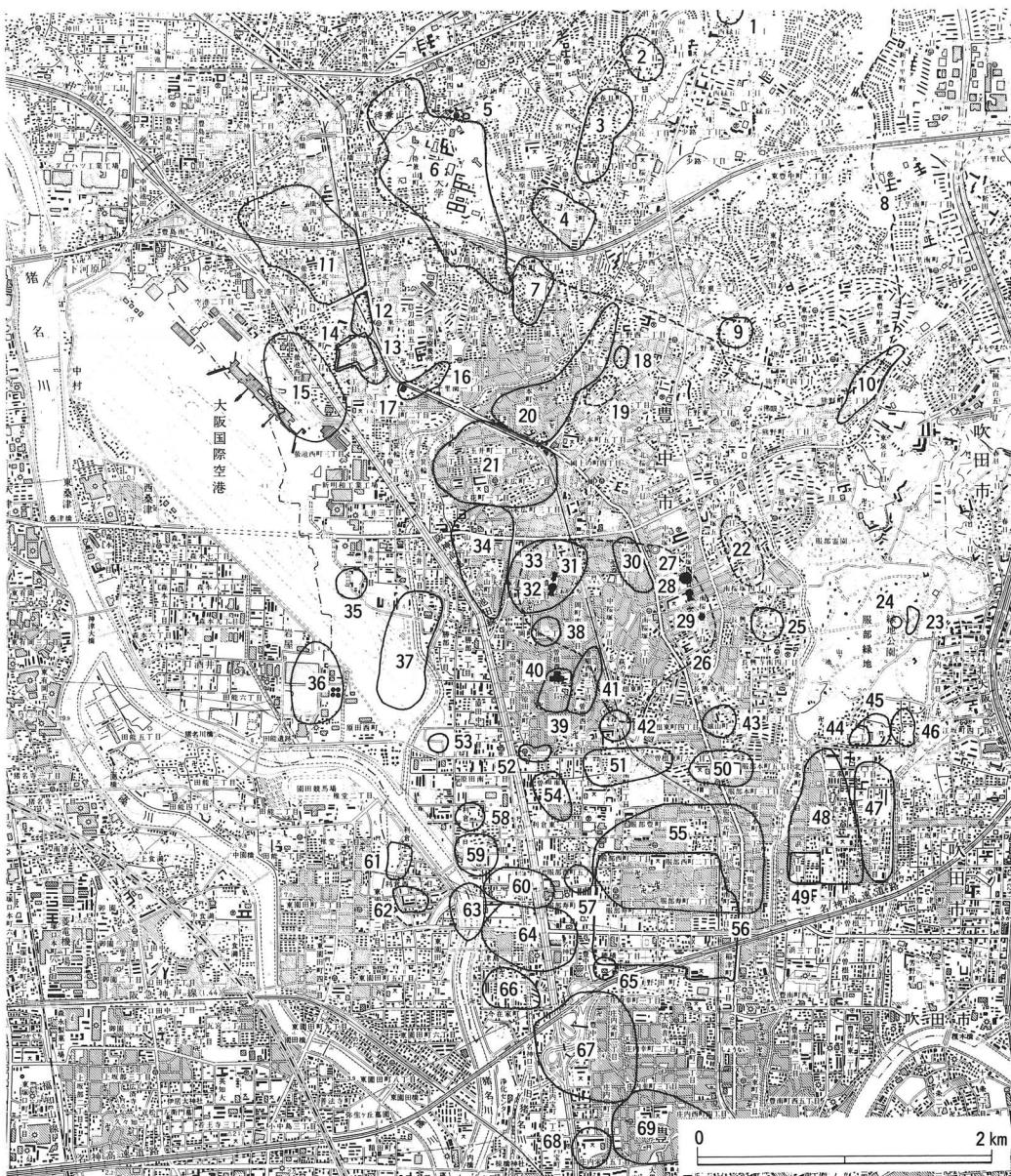
弥生時代前期になると、平野部の勝部遺跡、台地縁辺部の山ノ上遺跡などが出現し、中期には台地縁辺部に蛍池北遺跡、新免遺跡などの拠点的な集落が形成はじめる。後期には、利倉西遺跡、上津島遺跡、穂積遺跡などの多数の遺跡が平野部に展開する。

古墳時代の集落は弥生時代以来の集落立地を踏襲し大きな変動は認められないが、中期になると蛍池東遺跡において一般的集落とは区別される性格の大型掘立柱建物群が出現する。後期には、新免遺跡、本町遺跡、柴原遺跡、熊野田遺跡において桜井谷窯跡群の須恵器生産と密接な関連をもって展開する動向が認められる。一方、古墳は待兼山古墳などの前期古墳が千里丘陵縁辺部に築造されるが、中期には豊中台地に桜塚古墳群が出現する。桜塚古墳群は、大石塚古墳・小石塚古墳を中心とする西群と、大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳を中心とする東群の二群からなる。後期には、太鼓塚古墳群などが形成される。この他、新免遺跡、穂積遺跡、利倉南遺跡において古墳が発見されている。

飛鳥時代から奈良時代にかけては、金寺山廃寺が建立され、本町遺跡では関連する集落が出現する。奈良時代から平安時代には蛍池北遺跡、曾根遺跡、上津島南遺跡、島田遺跡など台地及び平野部の多数の遺跡で律令集落が形成される。

平安時代後期には、定住度の高い建物群が比較的集まって形成する集落が上津島南遺跡や春日社領垂水西牧である小曾根遺跡など平野部に集中して出現する。室町時代の集落の概要は不明であるが、小曾根遺跡では建物群が密集して集落を形成し、熊野田遺跡のように街道沿いの丘陵支谷や台地上にも集落が出現するなど、集落の景観などに変動があったものと推定される。

近世になると、少路、内田、柴原、熊野田、原田、勝部、小曾根、穂積、庄内などの集落が文献から知られている。これらの集落の多くは幕藩体制の下で天領に属しているが、大名領としては麻田藩、岡部藩などが存在する。これらの集落や町、陣屋の立地や景観等については、概要を知り得るだけの調査が蓄積されておらず、今後の検討課題となろう。



- |            |             |            |           |               |            |              |
|------------|-------------|------------|-----------|---------------|------------|--------------|
| 1. 野畠遺跡    | 11. 畦池北遺跡   | 21. 新免遺跡   | 31. 小石塚古墳 | 41. 曾根遺跡      | 51. 豊島北遺跡  | 61. 椎堂の前遺跡   |
| 2. 野畠春日町遺跡 | 12. 畦池東遺跡   | 22. 下原窯跡群  | 32. 大石塚古墳 | 42. 曾根東遺跡     | 52. 原田元町遺跡 | 62. 利倉西遺跡    |
| 3. 少路遺跡    | 13. 畦池遺跡    | 23. 植輪散布地  | 33. 岡町北遺跡 | 43. 城山遺跡      | 53. 原田中町遺跡 | 63. 上津島川床遺跡  |
| 4. 内田遺跡    | 14. 麻田藩陣屋跡  | 24. 梅原古墳   | 34. 山ノ上遺跡 | 44. 石蓮寺廢寺     | 54. 曾根南遺跡  | 64. 上津島遺跡    |
| 5. 待兼山古墳   | 15. 畦池西遺跡   | 25. 長興寺南遺跡 | 35. 走井遺跡  | 45. 若竹遺跡      | 55. 穂積遺跡   | 65. 穂積ポンプ場遺跡 |
| 6. 待兼山遺跡   | 16. 南刀根山遺跡  | 26. 桜塚古墳群  | 36. 原田西遺跡 | 46. 寺内遺跡      | 56. 穂積村囲堤  | 66. 上津島南遺跡   |
| 7. 柴原遺跡    | 17. 御神山古墳   | 27. 大塚古墳   | 37. 勝部遺跡  | 47. 北条遺跡      | 57. 服部西遺跡  | 67. 島田遺跡     |
| 8. 桜井谷窯跡群  | 18. 金寺山廃寺   | 28. 御獅子塚古墳 | 38. 岡町南遺跡 | 48. 小曾根遺跡     | 58. 利倉北遺跡  | 68. 島江遺跡     |
| 9. 上野遺跡    | 19. 新免宮山古墳群 | 29. 南天平塚古墳 | 39. 原田遺跡  | 49. 南郷代官今西家屋敷 | 59. 利倉遺跡   | 69. 庄内遺跡     |
| 10. 熊野田遺跡  | 20. 本町遺跡    | 30. 岡町遺跡   | 40. 原田城跡  | 50. 服部遺跡      | 60. 利倉南遺跡  |              |

第1図 周辺の遺跡分布図(1/50,000)

## 第Ⅱ章 麻田藩陣屋跡第5次調査の概要

### 1. 調査の経緯

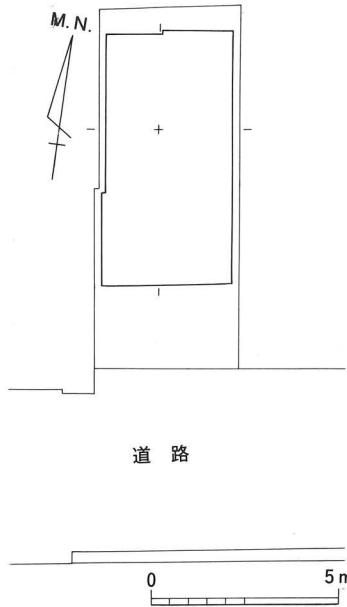
調査地点は、螢池中町3丁目32-3に所在する。店舗兼個人住宅の建築申請の提出に基づく立会調査の結果、遺構を検出した。よって、建築に先立ち、1992年4月2日より4月14日の日程で、建物範囲である26m<sup>2</sup>を対象に本調査を行った。

### 2. 調査の概要

#### (1) 基本層序

当調査区の大部分はすでに削平をうけ、本来の基本層序を把握するにはいたらなかった。

現状では、現地表面より深さ約60cmのところまで盛土が覆い、その直下に明黄褐色粘質土層を検出した。遺構はすべて明黄褐色粘質土層上面から検出している。



第2図 調査地範囲図(1/200)



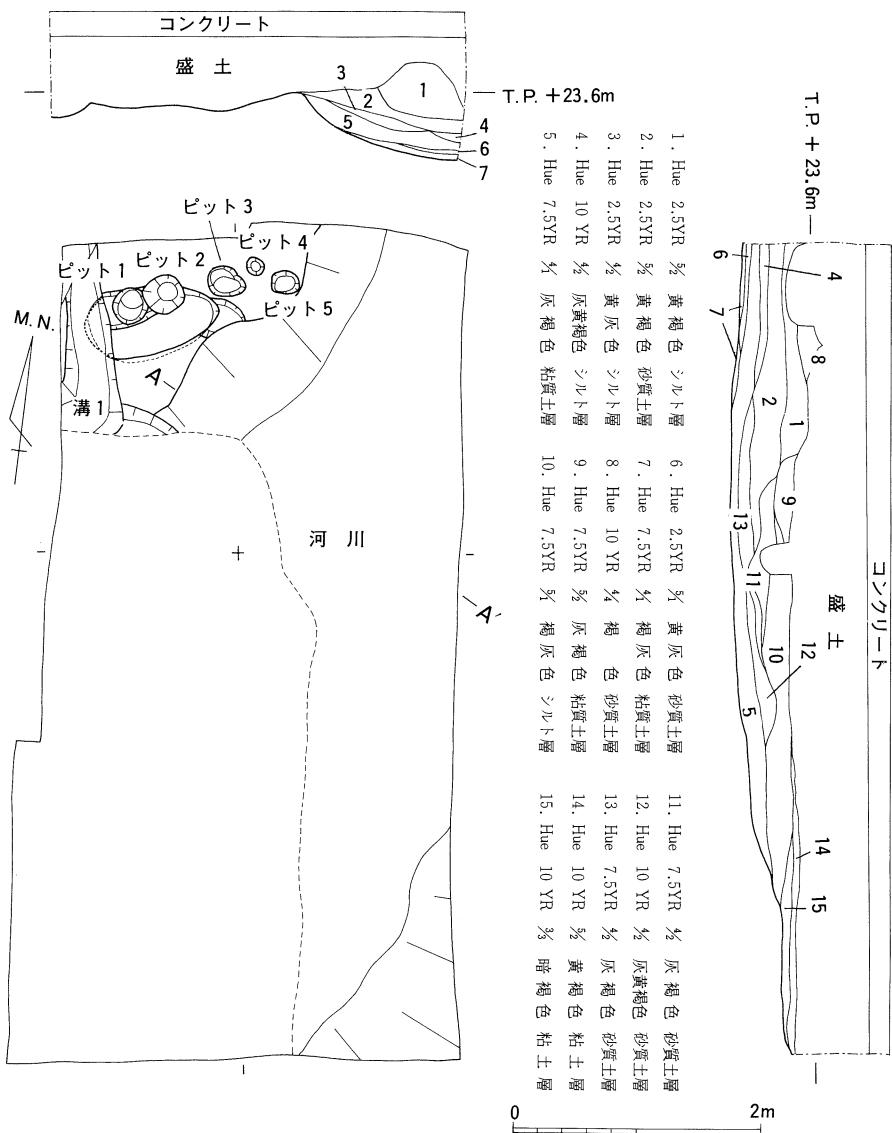
第3図 調査地位置図(1/5000)

## (2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区からは、柱穴と考えられるピット5基、溝3条、土坑1基、河川1条を検出した。

以下、ピット、河川の概要について記述する。

**ピット** 調査区北部に土坑、溝とともに密集して直径25cm前後の柱穴5基を検出した。土層断面の観察により、5基のピットすべてから柱痕を検出している。ただ、調査区の範囲が特に限定されていることから、建物を復元することはできなかった。また、5基の柱穴のうち、根石を有するもの（ピット1・4・5）と有しないもの（ピット2・3）の二種がある。このう



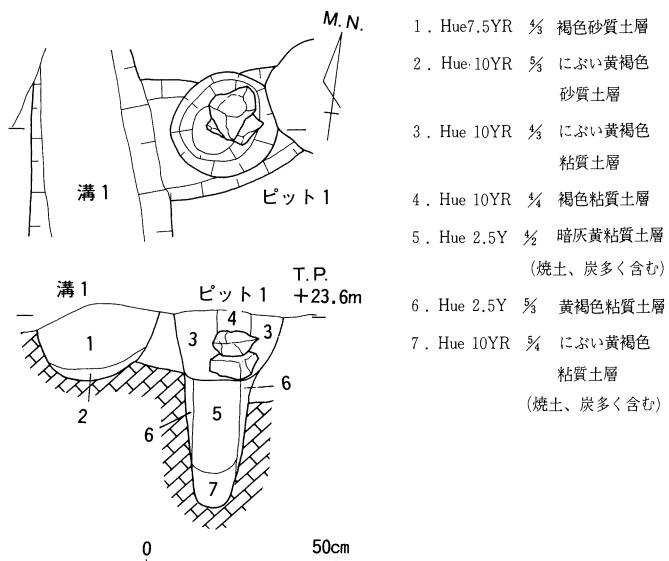
第4図 調査区平面図 (1/60)

ち、ピット1について記す。

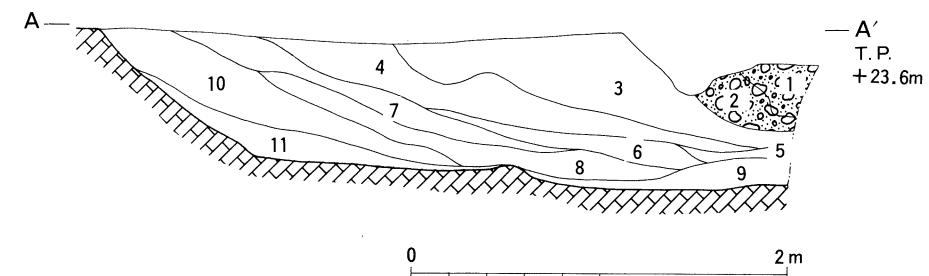
ピット1は、検出面直上において直径27cm、深さ40cmをはかる。土層断面の観察から新古2基の柱穴が重複していることを確認した。ここでは、ピット1下部の古い柱穴をピット1a、ピット1上部の新しい柱穴をピット1bとする。ピット1a、1bでは柱痕の規模および柱穴の構造が異なる。ピット1aは柱痕の直径が17cmで根石を有さず、検出面より40cm下まで掘り込まれてい

る。また、柱痕の埋土には多量の焼土、炭が含まれており、家屋の廃絶に火災等の関連が想定できる。ピット1bは、深さ17cm、柱痕直径13cmをはかり、15cm大の角礫二つを根石とする。ピット1bは、ピット1a埋め戻し後に改めて作られたものと言える。

**河川** 調査区中央部から南部にかけて検出した。調査面積の限定もあって、その規模を明確にすることはできないが、検出部分で幅2.9m、最深部で深さ65cmをはかる。河川は、調査区の北東から南西に向けて流れていたものと推定できる。河川埋土の堆積状況を観察すると、上下2層に大別することができる。下層は下より砂層、極細砂層、砂礫層の順で自然堆積し、上層

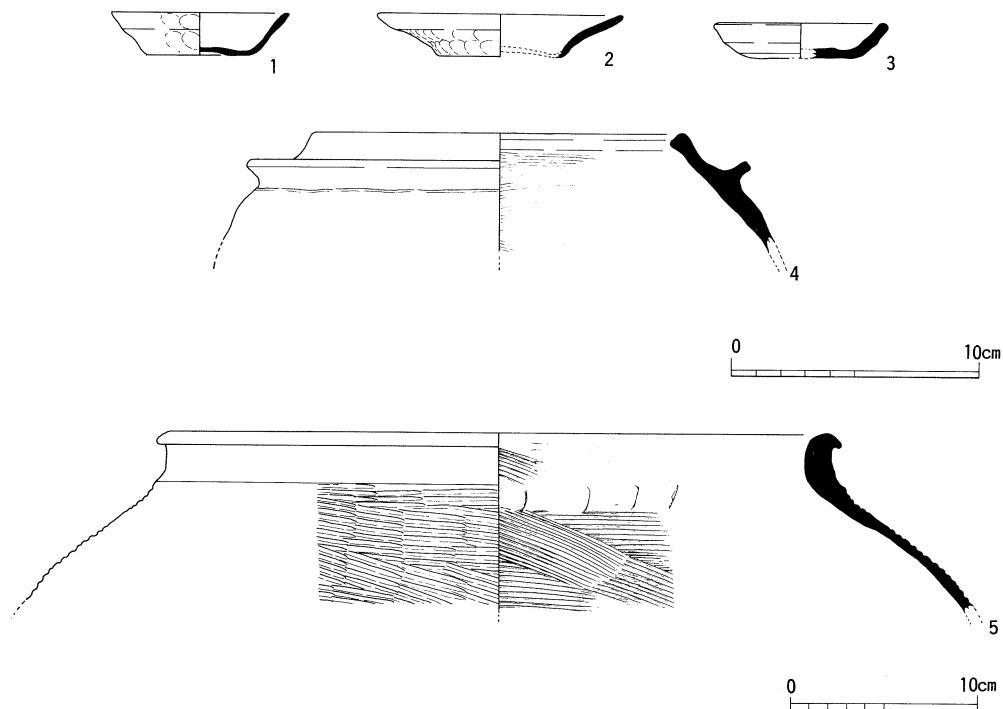


第5図 ピット1平面・断面図 (1/20)



1. Hue 7.5YR %	褐灰色粘土層(5~15cm大の礫多く含む)	7. Hue 10 YR %	灰黃褐色粘質土
2. Hue 7.5YR %	灰褐色砂質土層(1~3cm大の円礫多く含む)	8. Hue 2.5Y %	黄褐色砂質土
3. Hue 10 YR %	灰黃褐色砂質土層	9. Hue 7.5YR %	灰褐色粘質土層
4. Hue 10 YR %	灰黃褐色砂質土層(マンガン班あり)	10. Hue 10 Y %	にぶい黄褐色砂質土層
5. Hue 10 YR %	灰黃褐色砂質土層	11. Hue 2.5Y %	暗黃灰色砂質土層
6. Hue 10 YR %	灰黃褐色粘質土層		

第6図 河川土層断面図 (1/40)



第7図 河川出土遺物 (1~4 1/3、5のみ1/4)

は多量の礫と若干の摩滅した土器片を含む砂質土層が堆積している（第6図 河川土層断面図のアミ部分）。上層の堆積は自然の営力とは考えにくく、人為的な堆積が想定される。

河川上層、下層から第7図に示す遺物が出土している。上層出土のものは小片で摩滅が著しいため、図化し得たものは4の1点のみに限られる。ほかは、すべて下層出土のものである。1は推定で口径7.2cm、器高1.7cmをはかる皿である。2は推定で口径10.0cm、器高1.7cmをはかる皿である。3は、推定で口径7.5cm、器高1.4cmをはかる東播系須恵器の小皿である。4は、推定で口径15.0cm、鍔径20.4cmをはかる瓦質の三足釜の口縁部である。5は、口径26.4cmの甕である。遺物は、14世紀から15世紀の時期に属する。

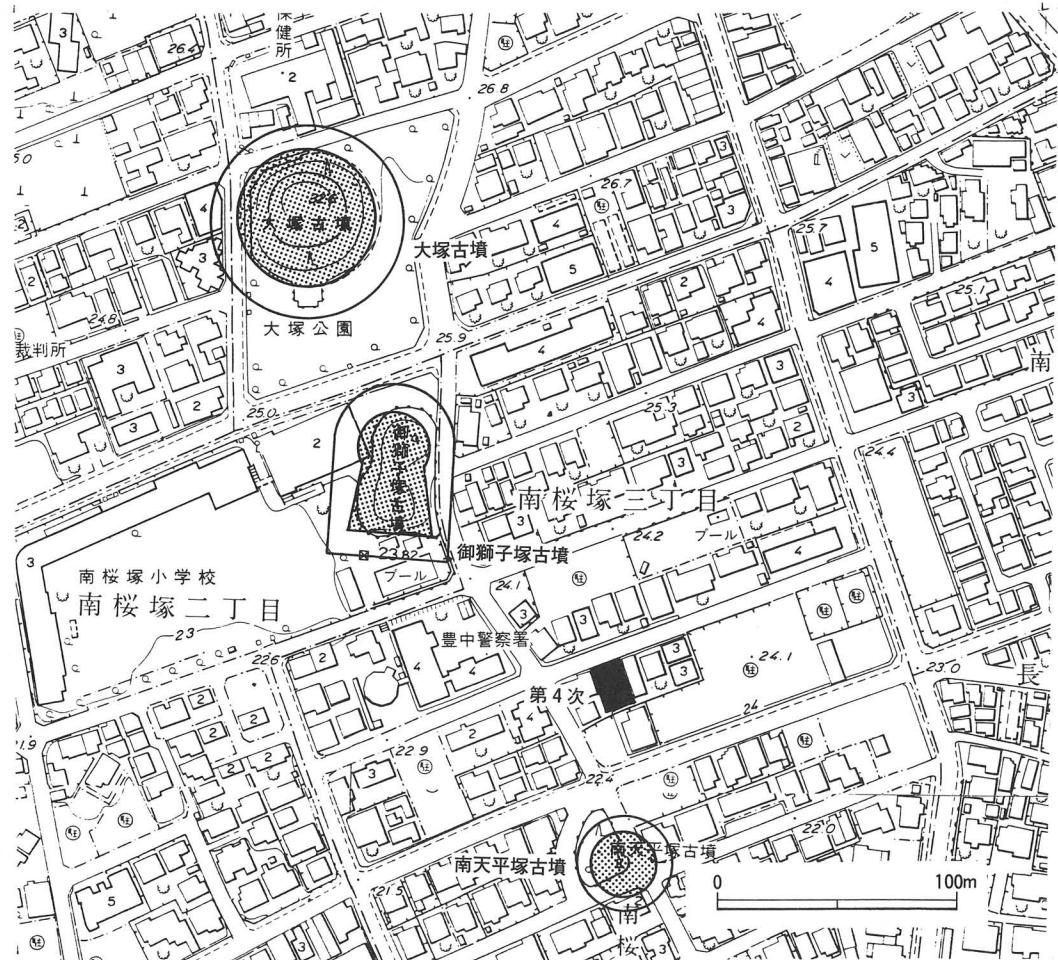
### (3) まとめ

今回の調査では、麻田藩陣屋関連遺構は検出できなかったが、麻田藩陣屋成立以前の集落遺構を検出した。ところで、麻田藩陣屋は祝正治氏の屋敷を譲り受け、1615年ころに成立したことから、麻田藩陣屋が先行する中世集落を母体に成立したことが予想される。しかし、先行する集落がいつ頃に成立したのか、またどのような性格のものかを知る情報は存在していない。よって、今回検出した遺構も麻田藩陣屋に先行する集落の一部の位置付はできないが、麻田藩陣屋の成立とは時期的な隔たりがあることから、祝正治氏との関連について想定できないだろう。今後は麻田藩陣屋跡の確認と共に麻田藩陣屋成立以前の集落遺構も留意する必要がある。

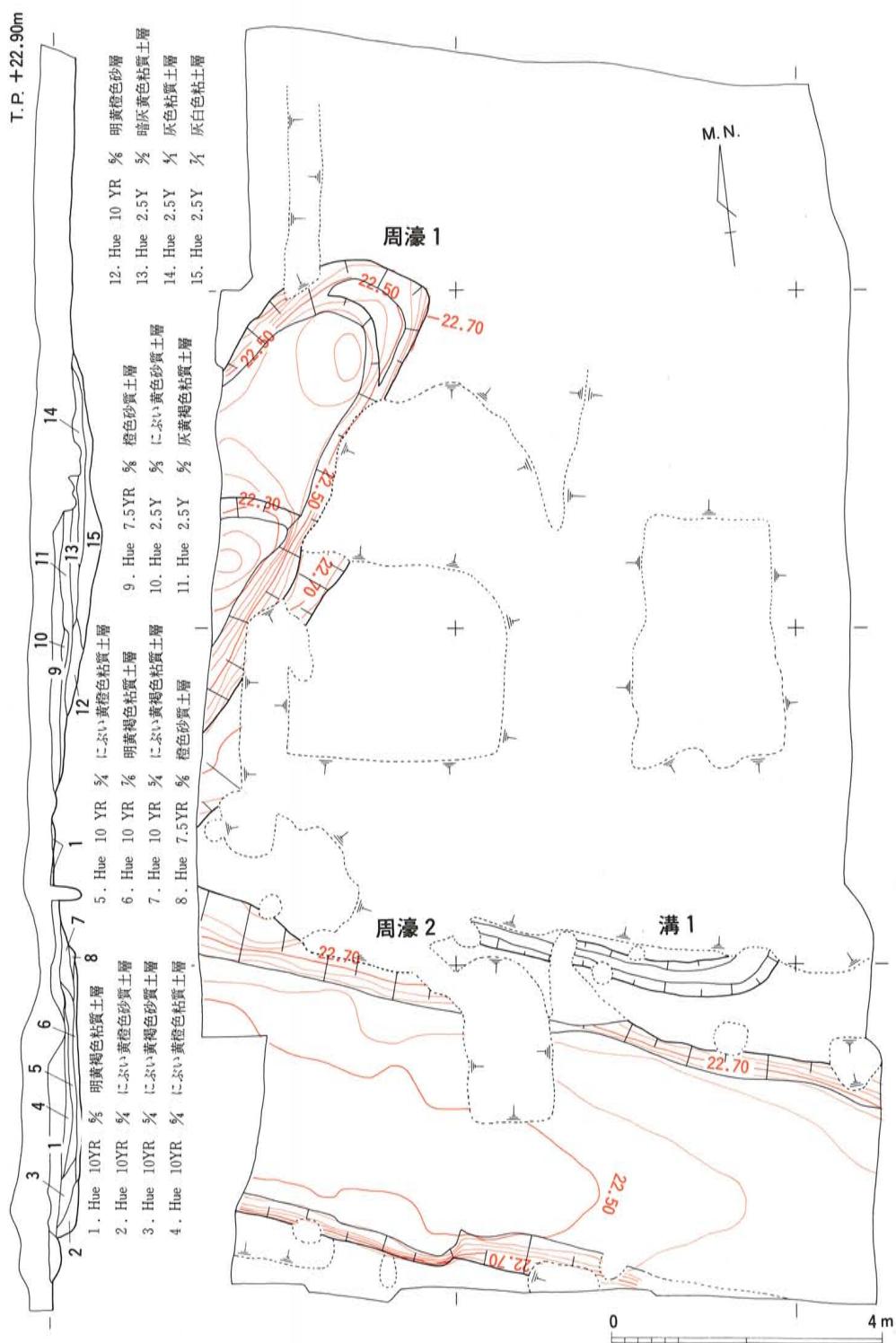
### 第Ⅲ章 桜塚古墳群第4次調査の概要

#### 1. 調査の経緯

調査地は、南桜塚3丁目128-1・2に所在する。当地は桜塚古墳群内に位置しているが、特に付近は昭和12年の土地区画整理工事により破壊された北天平塚古墳が存在したものと推定されている地点である。今回、個人住宅兼共同住宅の建築申請の提出に基づき、立会調査を行ったところ古墳の周濠と考えられる溝状遺構が2条ほど検出された。調査結果に基づく協議の結果、建築工事着工に先立ち4月15日から5月16日の日程で、建物基礎の掘削範囲である156m<sup>2</sup>を対象に本調査を行うこととした。



第8図 調査地位置図



第9図 調査区平面図 (1/100)

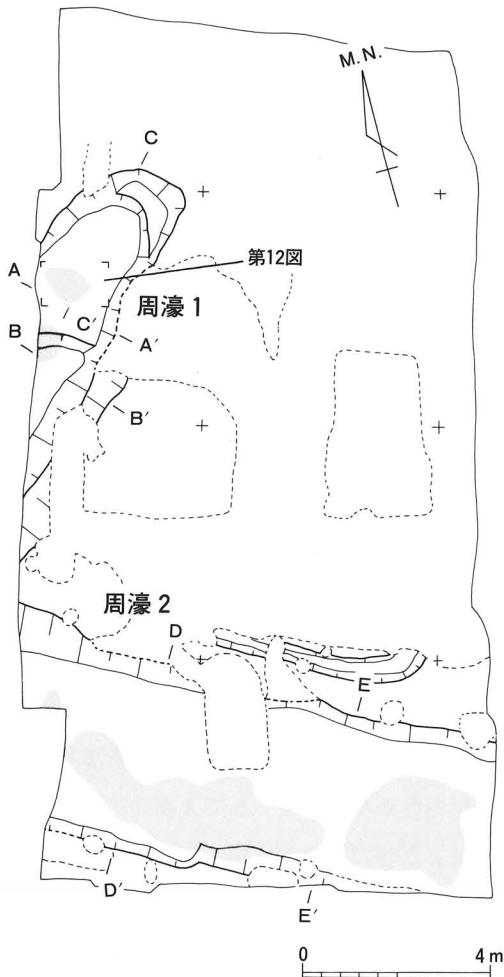
## 2. 調査の概要

### (1) 基本層序

調査地内は、ほぼ全面にわたって建物の基礎および解体時の廃材処理などによる搅乱をうけ、旧状を復元するには至らなかった。現状では、地表より厚さ約40cmの盛土が堆積する。その直下に白灰色シルト(粘土)層を検出した。遺構はすべて白灰色シルト(粘土)層の直上面から検出した。なお、調査区の南から著しく削平された北にむけて傾斜している。

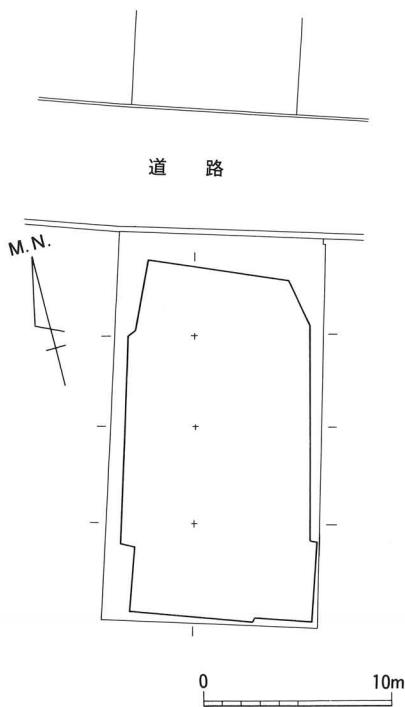
### (2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区において検出した遺構は、古墳の周濠2条と溝1条である。このうち、溝1は古墳墳丘の復元のあり方によって、古墳削平後の搅乱ともなり得る可能性がある。以下、周濠1および周濠2の概要について記すこととする。



第10図 周濠内埴輪片分布図 (1/160)  
(※アミ部分は埴輪の分布をしめす。)

**周濠1** 周濠1は、調査区中央西側にて検出した。ただ、調査区北部、中央部にかけて広がる搅乱によって削平されており、全容を把握することは困難である。周濠1の主軸は磁北に対して55度ほど東へ傾き、北東へ伸び



第11図 調査地範囲図 (1/400)



第12図 周濠1埴輪出土状況図 (1/15)

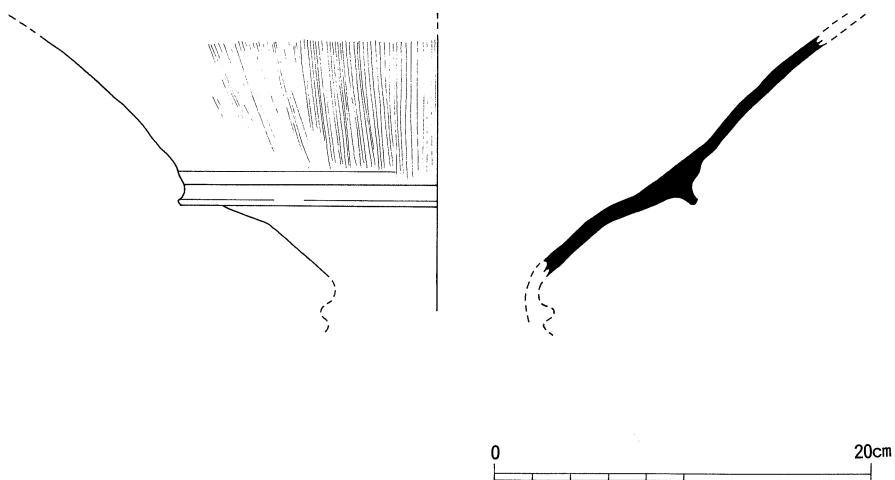
るが、北側では搅乱によって消滅し、南方は調査区外に伸びるため、方向は確認できなかった。

周濠1の断面の形状をみると、二段の掘り込みを呈する。周濠は検出面上より緩やかに落ち込み、周濠東岸の掘り方より75cm、深さ10cmのところから急激に落ち込む。最深部で深さ約60cmとなる。なお、二段目の掘り込みは、北方に向かって階段状に立ち上がり消滅する。

二段目の掘り方の幅は2.9mであるが、検出面における周濠の幅は不明である。ただ、東岸から二段目の掘り方まで75cmであることから、少なくとも3.65m以上あることは間違いない。

周濠埋土の状況を観察すると、検出面から大まかに墳丘流出土、自然堆積土、地山埋め戻し土の3層の堆積が認められる(第14図)。このうち、墳丘流出土は第14図周濠1土層断面の1・2・5に相当し、自然堆積土は第14図の3・6に相当する。なお、同層内から朝顔形埴輪(第13図)が転倒した状態で出土した(第12図)。地山埋め戻し土は、二段目掘り方から周濠基底面に堆積する第14図の4に相当する。二段目は、周濠掘削後から間もなくして人為的に埋め戻されたのであろう。周濠1が実際に古墳周濠として機能した時の周濠基底部は自然堆積土の直下(最深部で深さ30cm)となる。

第13図の朝顔形埴輪は、口縁部から頸部にかけて残存する。残存する口縁部の復元径は、41.6cmである。口縁部と頸部の境界にはタガが施される。タガは、約1cmほどやや下方に向かっ

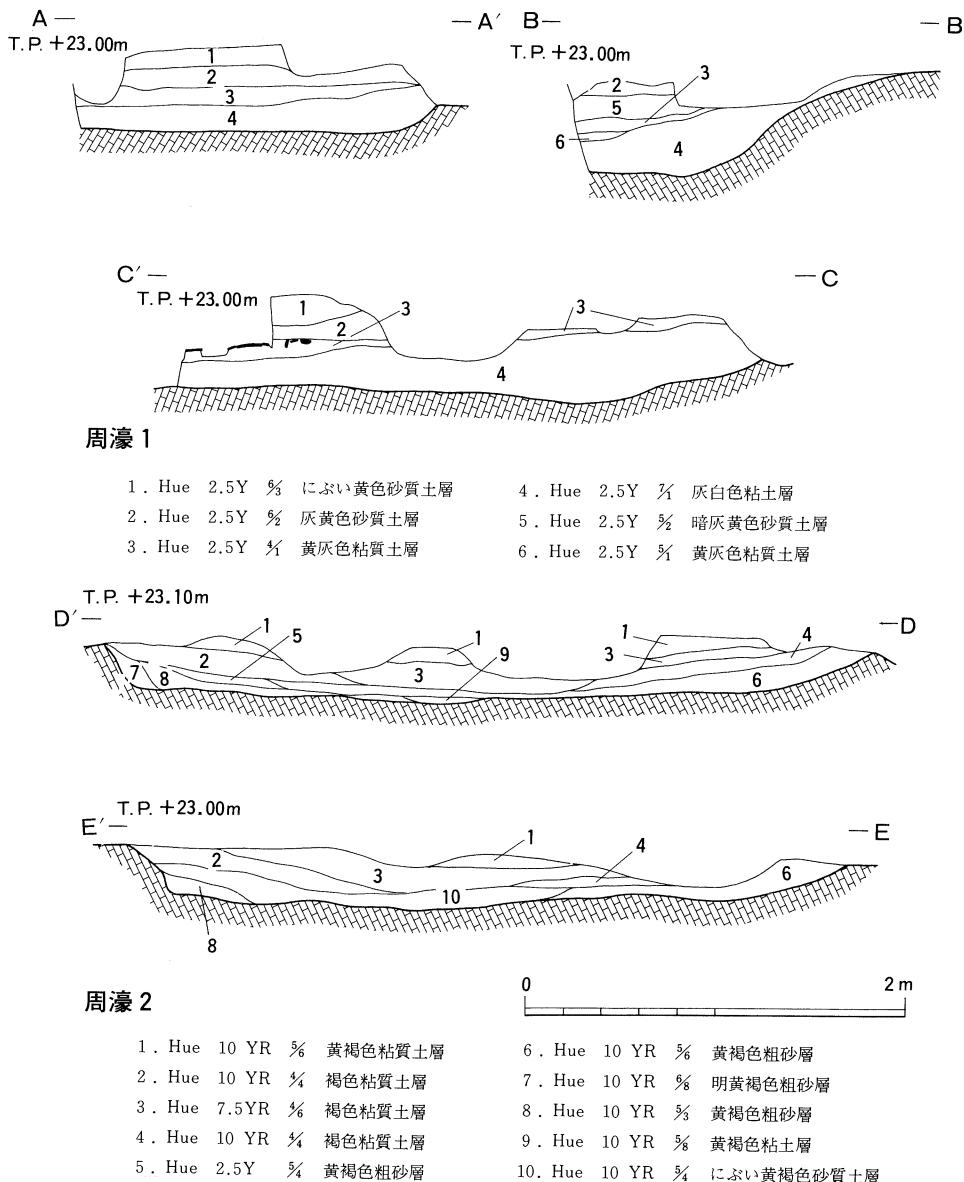


第13図 周濠1出土朝顔形埴輪 (1/4)

て突出する。外面の調整は、8本/cmのハケを下から上へ施す。内面の調整は、器壁の摩滅が著しいため不明である。この他にも円筒埴輪の破片が若干出土しているが、復元できなかった。

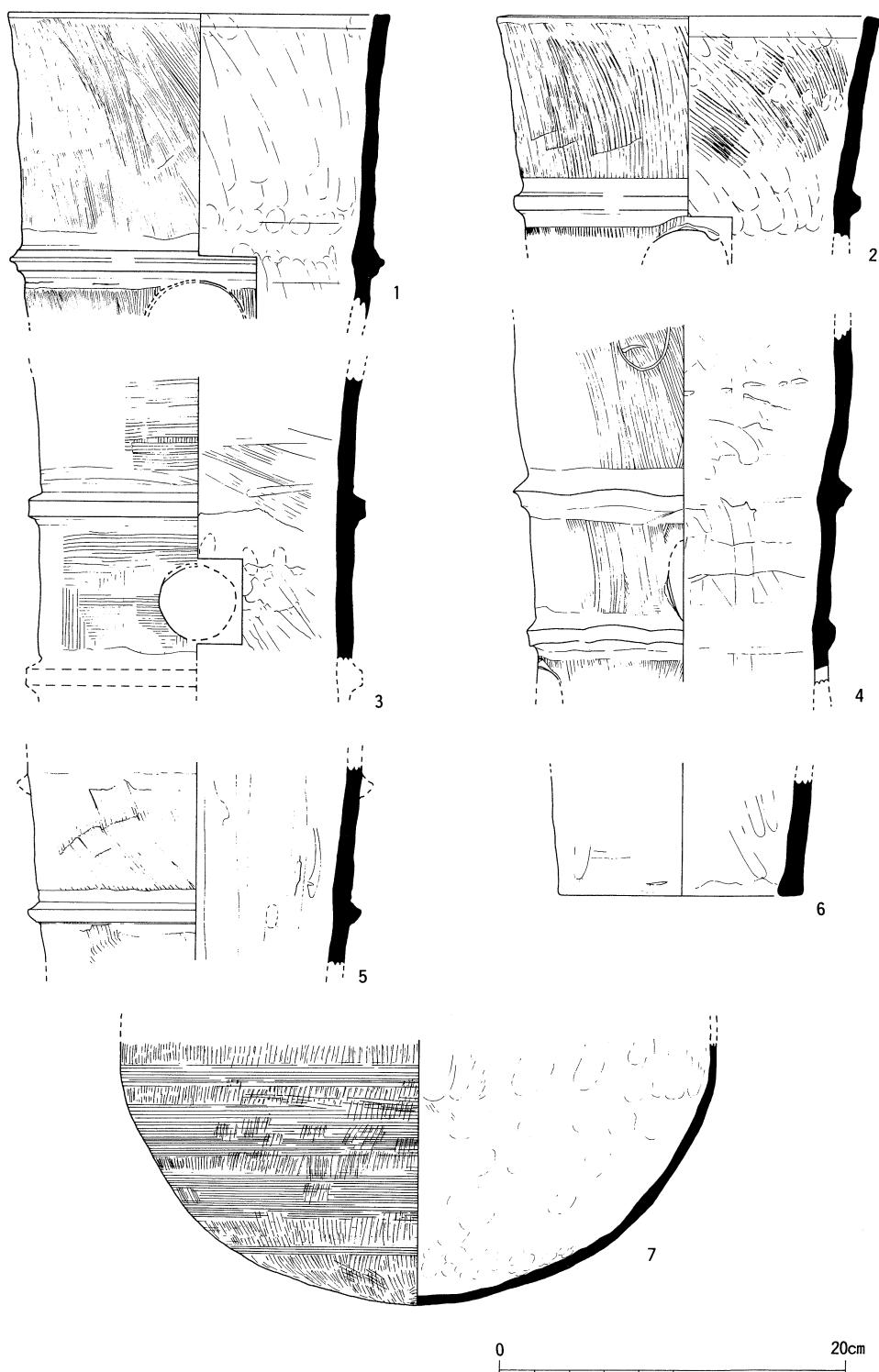
**周濠2** 周濠2は、調査区南部において検出した東西に直線的に伸びる幅約4.1m、深さ約30cmの周濠である。周濠の断面形状をみると、北岸は緩やかに落ち込むようにして基底部に至り、南岸は急激に落ち込むようにして基底部に至る。周濠基底部は起伏が少なく、平坦である。周濠埋土は、南側から北側にむけて自然に堆積する。特に、第14図周濠2土層断面図の2・3層から多量の埴輪片が出土している。周濠2における埴輪片の分布状況(第10図)をみると、埴輪片が周濠の南部に集中することがわかる。

周濠2からは多量の埴輪が出土した。この中でも保存状態が良好である代表的なものを第15図に図示した。1は円筒埴輪口縁部で、復元径22cmをはかる。タガは断面不整形で、幅2cm、約8mmほど突出するもので口縁端部から13.5cmのところにつく。直下に円形スカシが穿たれている。外面の調整はやや粗いタテハケを施すだけで、2次調整は省略されている。内面は、タテ方向の板ナデを施す。2も円筒埴輪の口縁部で、復元径20cmをはかる。タガは断面不整形で幅1.3cmで、約5mmほど突出するもので口縁端部から13.5cmのところにつく。タガ直下に円形スカシが穿たれている。外面の調整は粗いタテハケを施し、2次調整は省略する。内面は斜方向のハケを施す。3は円筒埴輪胴部で、残存上端部分の復元径は18.8cm、下端部分で17.8cmをはかる。タガの断面はしっかりした台形で幅2cmで、約8mmほど突出する。タガの間隔は約7.7cmと推定され、円形スカシが段中央に穿たれる。外面の調整はタテハケを施したのち、2次



第14図 周濠1・周濠2土層断面図 (1/40)

調整としてB種ヨコハケを施す。内面はタテ方向のナデを基本とするが、一部に斜方向のハケが施される。4は円筒埴輪胴部で、残存上端部分の復元径は19.4cm、下端部分で16.9cmをかる。タガは断面不整形で幅約2cmで、1cmほど突出する。タガの間隔は約6.5cmで、段中央に円形スカシを2方向に穿つ。スカシの位置は、段毎に直行するように穿たれている。外面の調整は1次調整、2次調整ともにタテハケを施す。内面はタテ方向のナデを施す。5は、円筒埴



第15図 周濠2出土遺物 (1/4)

輪胴部である。残存部の上端径は19.2cm、下端径は17.2cmである。タガは幅1.2cmで約6.5mm程突出する。外面には5~6本/cmのタテハケを施すが2次調整は省略する。内面はタテ方向のナデを施す。6は、円筒埴輪基底部である。基底部の復元径は約14cmをはかる。外面は摩滅しており、概要は不明であるが、タテハケを施していることが推定できる。7は、須恵器甕体部である。残存部分の体部復元径は33.8cm、残存での器高は14cmをはかる。底部より内反して立ち上がり体部下間に及ぶため、底部と体部の境界は明瞭ではない。外面の調整は、タタキのちカキメを断続的に施す。内面は、スリケシを施す。

埴輪は、二次調整を施すものや施さないものが共存し、調整や細部の形態等に個体差が認められる。ただ、タガの形状は御獅子塚古墳のものより退化傾向にあるが、南天平塚古墳のものほど退化しておらず、両者の中間的なあり方をしめす。これらの特徴より川西編年Ⅳ期の最新相またはⅤ期の最古相と考えておきたい。ただ、須恵器は内面スリケシを施しており、一般的にはTK-23型式以前のものと推定でき、遺物に時期差が認められる。以上より、周濠1の厳密な時期決定には問題が多いが、とりあえず5世紀末ころと考えておきたい。

### (3) まとめ

今回の調査で2条の周濠を検出した。しかし、家屋解体時の廃材処理坑による搅乱が著しく、また、調査区の限定もあり、北天平塚古墳の位置、墳形等について確実な知見を得るには、なお十分なものとはいえない。ただ、2条の周濠は異なる古墳のものと考え、そのうち一方を北天平塚古墳とする説と2条の周濠は同一古墳の周濠のものとして北天平塚古墳と考える説の二説を設定することができるだろう。

前者は、周濠2の掘り方および埴輪の出土状況が、古墳墳丘の位置を周濠の南側に推定する上で有利であることに立脚する。また、周濠1、2の埋土の色調や堆積状況、土質が異なることや周濠1が二段掘りを行ったのちすぐ埋め戻されているのに対して、周濠2にはそれがないなどの相違点も周濠1と2が別々の古墳に伴うものと考える要素となる。一方後者は、周濠1と周濠2の位置関係が、前方後円墳の前方部の一部に復元できることに立脚する。また昭和12年の土地区画整理工事に伴う調査で2基の主体部が発見され、第1主体部から縫樋5面、短甲5領等、第2主体部から直刀2口、小刀1口、挂甲が出土していることは、北天平塚古墳を前方後円墳と考える要素となる。なお前者の説の場合、周濠1の墳形は不明であり、周濠2は方墳となる可能性が高いことから、少なくとも周濠2を北天平塚古墳と考えるには困難となる。

ここで、二つの仮説のいずれが正しいか、決定することはできない。この問題を解決し、北天平塚古墳の概要および周辺の古墳の存在を明らかにするためには、今後とも隣接地の調査を行い、検討する必要があろう。

## 第Ⅳ章 新免遺跡第42次調査の概要

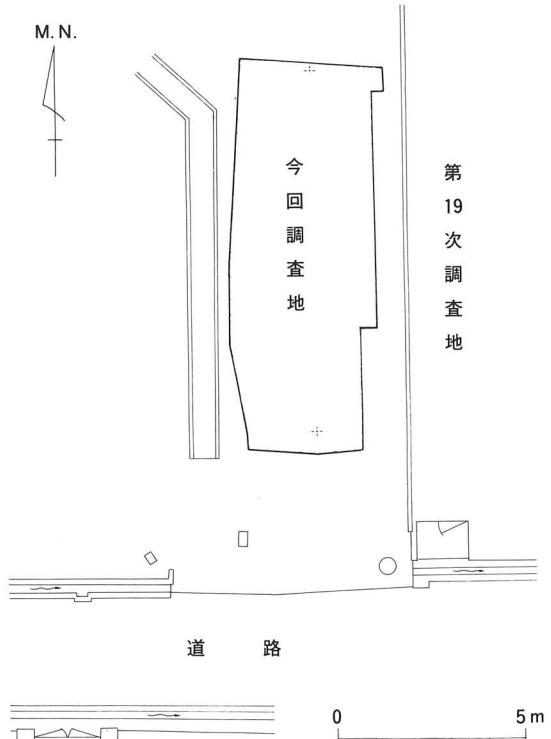
### 1. 調査の経緯

調査地点は、玉井町2丁目34番地に所在し、事務所と個人住宅専用駐車場の建設予定地であった。周知の新免遺跡の範囲に該当し、隣接地が第19次調査地にあたるため、試掘調査を行った。その結果、遺構が検出されたために当該調査を行う運びとなり、対象となる面積は54m<sup>2</sup>となった。

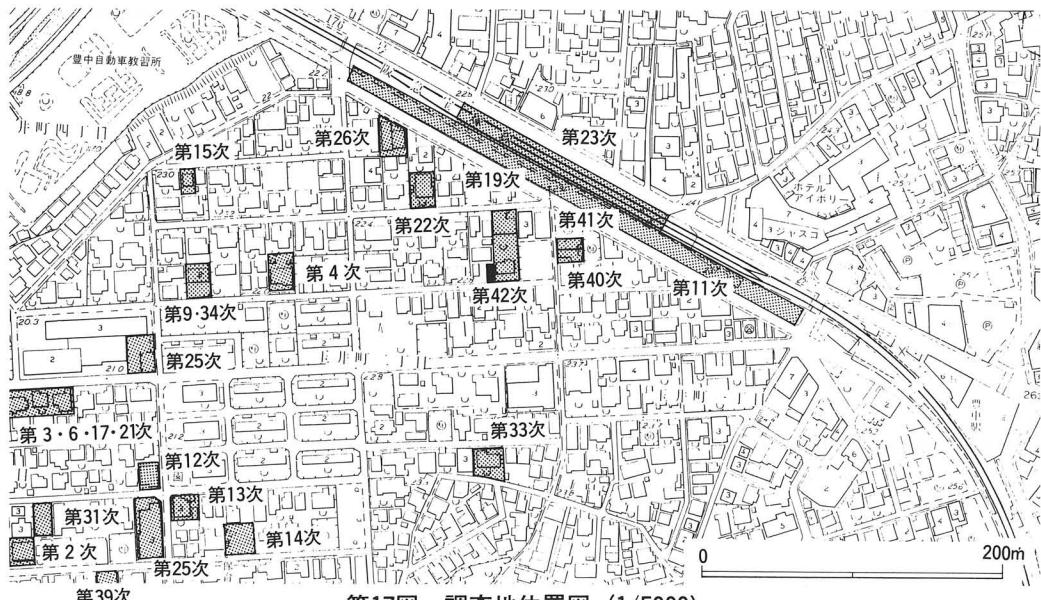
### 2. 調査の概要

#### (1) 基本層序

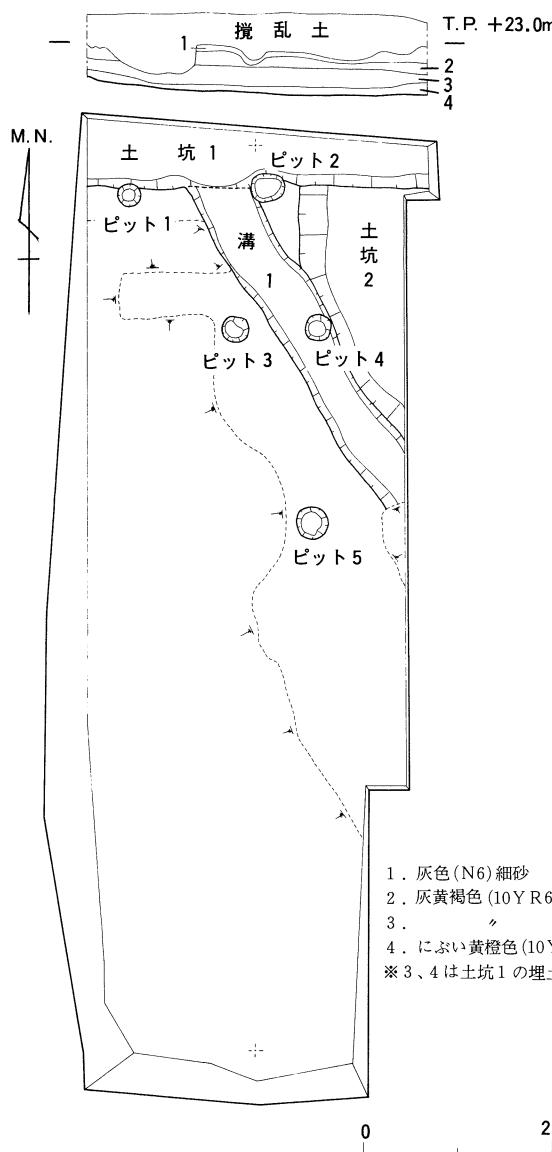
調査区内の基本層序は、第Ⅰ層が既存建物による搅乱土と整地土、第Ⅱ層が灰黄褐色(10 YR 6/2)細粒砂で中世の遺物包含層である。第Ⅲ層は洪積層であり、明黄灰色系



第16図 調査地範囲図 (1/200)



第17図 調査地位置図 (1/5000)



第18図 調査区平面図 (1/80)

土である。これらは出土遺物等から古墳時代の掘立柱であろうと推定される。ただし、今回の調査では限られた範囲内であったこと、また第19次調査地でも、近接した位置には関連が想定される柱穴がほとんど検出されていないことなどから、明確な建物規模等を確認することはできなかった。

**土坑1** 土坑1は調査区の北端部分で検出された。全体が検出されたわけではなく、直線的に伸びる南側の肩部が確認されたにすぎないので、調査時点では土坑として取り扱った。しかし、第19次調査地ではほぼ同様の位置で、東西に直線的に伸びる溝が検出されており、当該土

のシルト及び粘土で構成されている。遺構はすべてこの第Ⅲ層上面から検出されている。

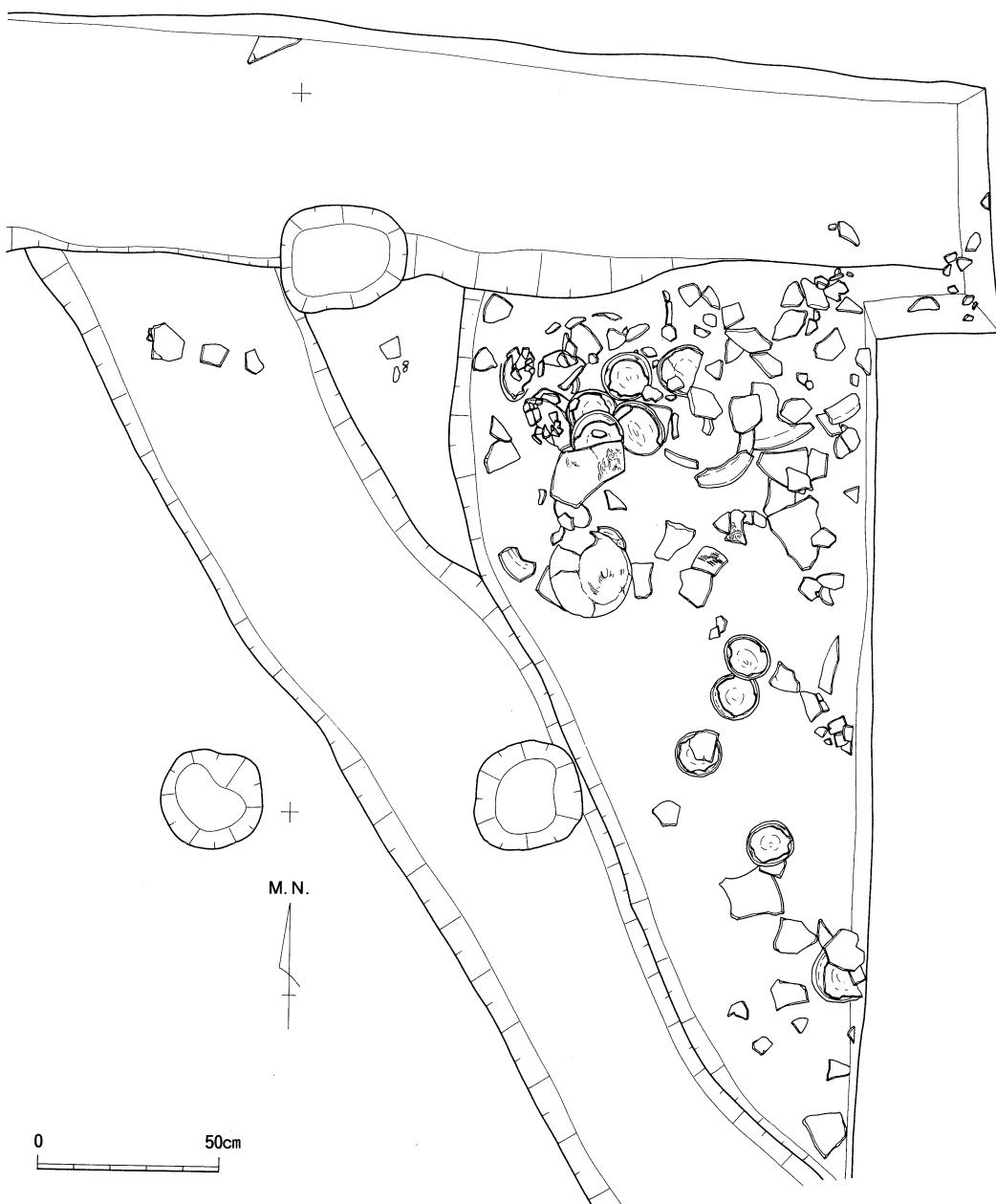
## (2) 検出した遺構と出土遺物

調査区内ではピット5基、土坑2基、溝1条を検出した。当該調査区の東隣は、第19次調査地であり、非常に多数の遺構や遺物が検出されているので、その関連をも考慮しながら、以下に概略を述べる。

**ピット** これらは各々が柱穴であったと考えられるが、明確に柱の痕跡を確認することができたのはピット5のみにすぎない。

ピット1、2、4は直径約30cm程度、深さ約30cm程度を測る。平面プランは楕円～正円形で、埋土は灰褐色系の細粒砂である。これらは、埋土の状態や出土遺物などから勘案して、概ね中世以降の時期に該当するものと考えられる。

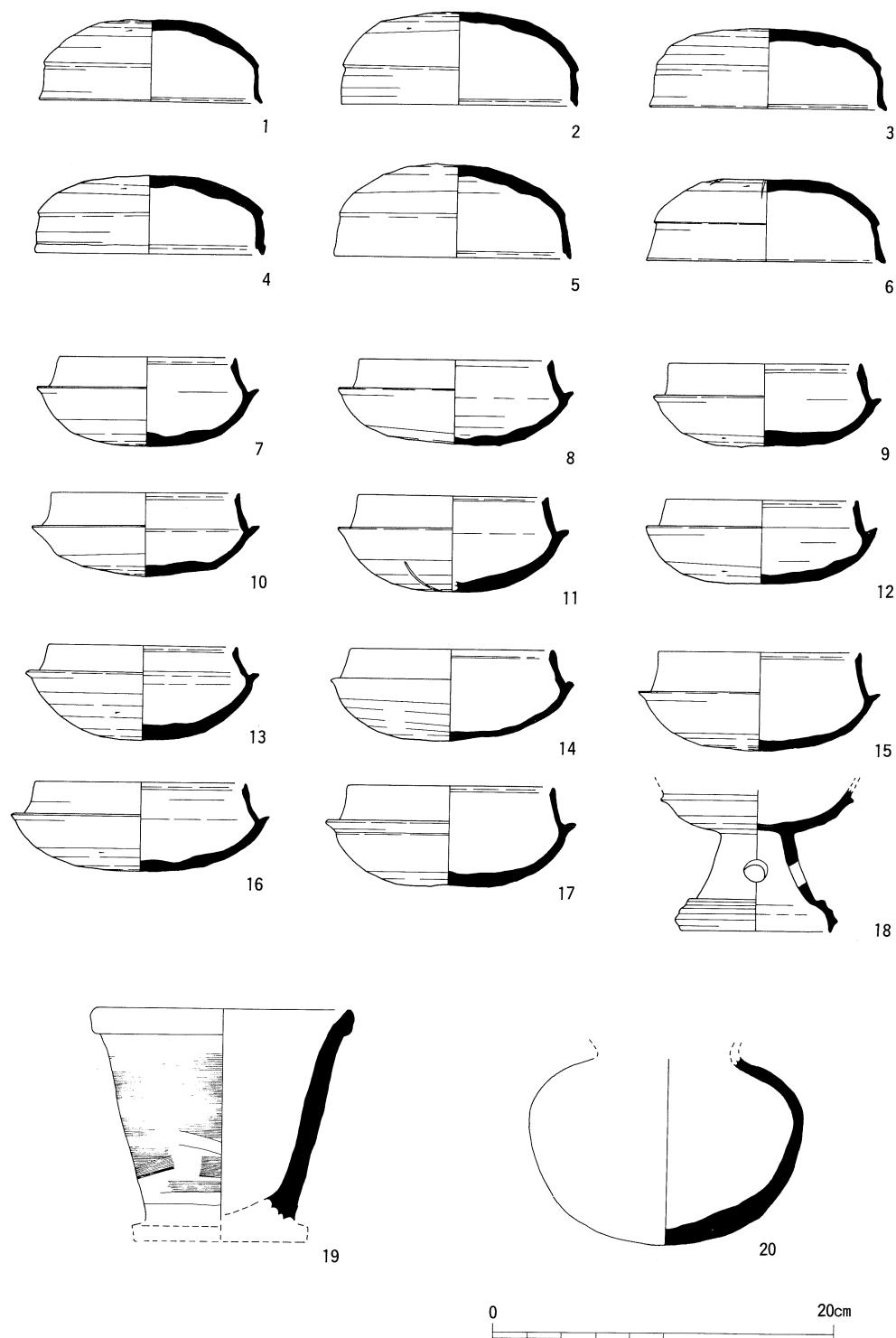
ピット3、5は長径約30cm、深さ約30cmを測る。平面プランは隅丸方形で、暗褐色系のシルトが埋



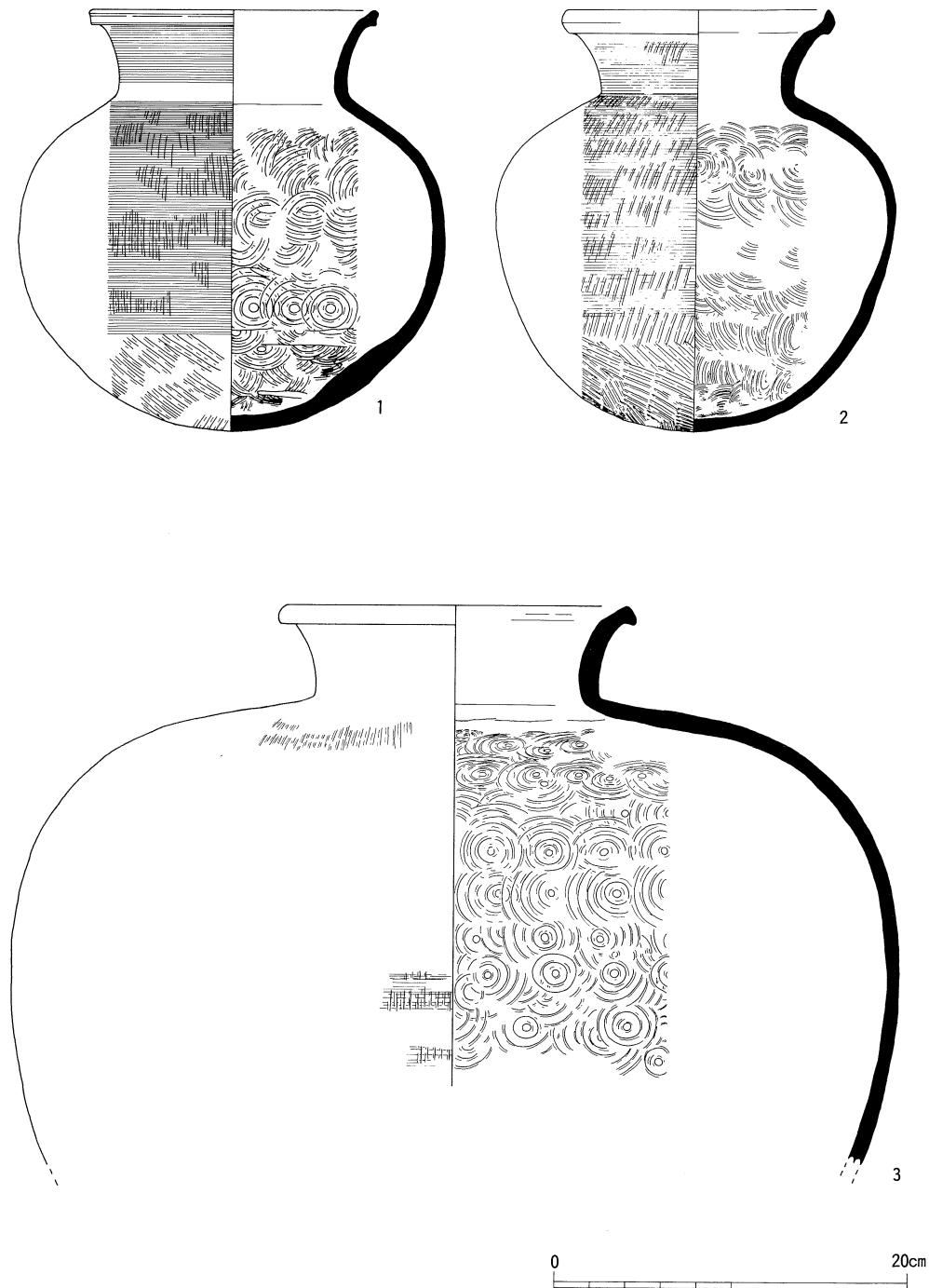
第19図 土坑2 遺物出土状況図 (1/20)

坑もその延長上に続く溝と理解する方が妥当である。残存した深さは約30cm、埋土は灰黄褐色(10YR 6/2) 細粒砂とにぶい黄橙色(10YR 6/4) 細粒砂で構成される。土坑1は他の遺構との重複関係から当該調査区で、最新の遺構であろうと考えられる。

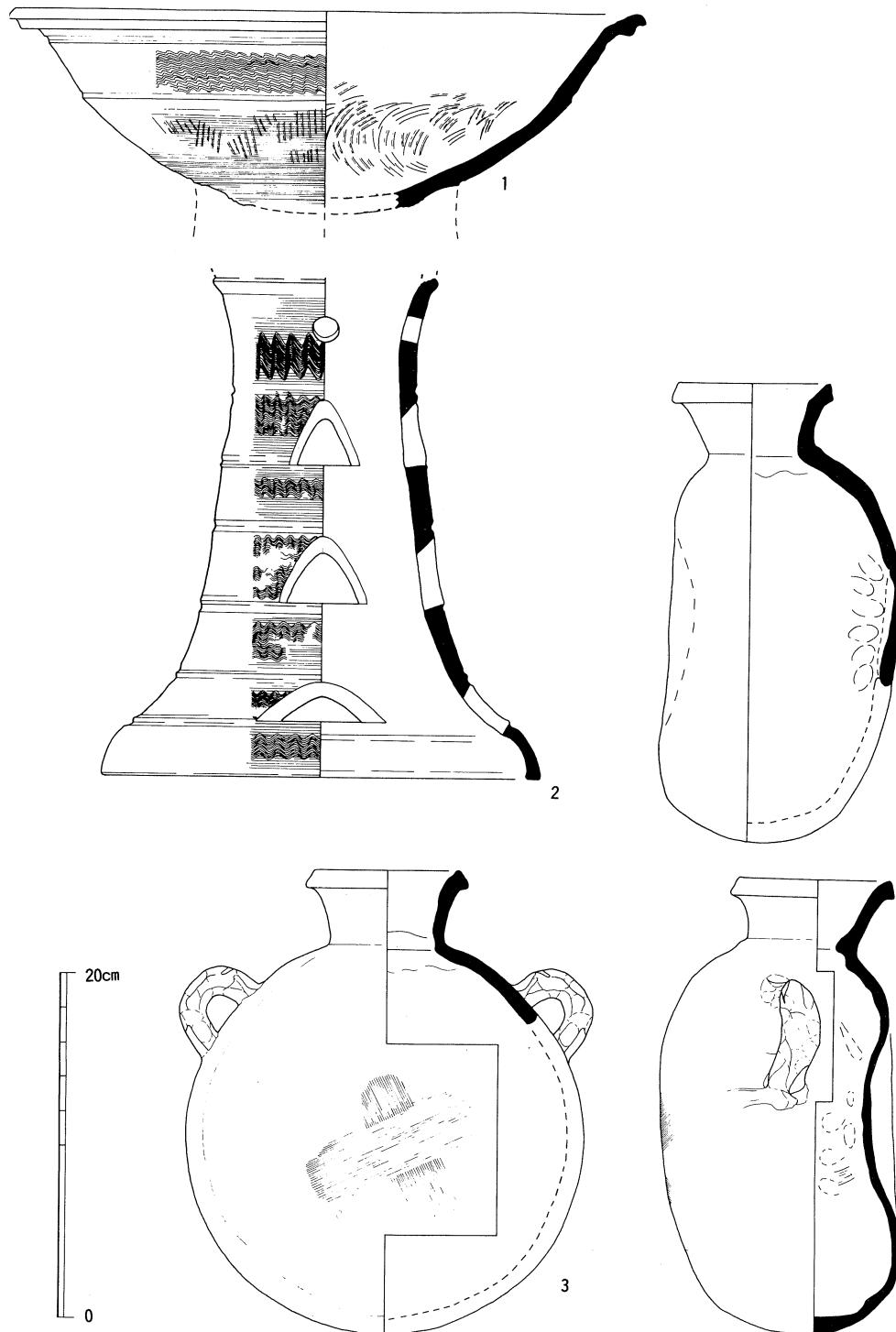
**土坑2** 土坑2は、第19次調査地で検出されたSK(土坑)-5に非常に近似した内容を持



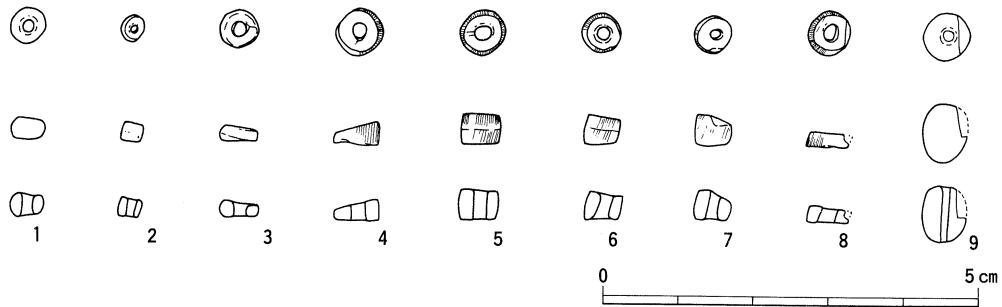
第20図 土坑2出土遺物 (1) (1/4)



第21図 土坑2出土遺物 (2) (1/4)



第22図 土坑2出土遺物 (3) (1/4)



第23図 土坑2出土遺物(4)(1/1)

っている。遺存した深さは約30cmを測る。埋土は土坑1とほぼ同様であるが、最下層はシルト質が強く、土色もやや暗くなっている。土坑2の埋土からは、大量の須恵器と玉類が出土している。須恵器は焼成不良のものなどを含んでおり、桜井谷窯跡群との強い関連を示唆しているものと考えられる。須恵器は土坑内の中層から出土している。また、ほとんどの玉類は土坑内の最上層から出土しており、集落あるいは作業場の廃絶に伴って、何らかの祭祀行為が行われた可能性が高い。

**溝1** 溝1は土坑2の西側に併行する溝で、幅約50cm、遺存した深さ約20cmを測る。溝1は土坑1、2に先行して機能していたものと考えられる。遺物はほとんど出土していない。

**須恵器** 第20~22図に掲げた須恵器群は、すべて土坑2の埋土の中層から出土したものである。器種は圧倒的に蓋坏が多く、中型の壺、甕、器台、高坏、提瓶、捏鉢などが見られる。

杯蓋は、口唇部径13.0~14.0cm、稜径12.6~13.8cm、器高4.6~5.5cm、稜高2.1~2.6cmを測る。回転ヘラケズリは天井部の約 $\frac{1}{3}$ に及び、強い回転ナデによって稜を作り出しているがあまり明瞭ではない。口唇部の内面には、回転ナデによって比較的明瞭な段が作られている。第20図-4は口唇部外面にはみ出た粘土をヘラケズリで除去している。第20図-6にはヘラ記号が施されている。

坏身は、口唇部径10.3~12.3cm、たちあがり基部径11.6~13.6cm、受部径13.0~15.1cm、器高4.9~5.8cm、たちあがり高1.5~2.3cmを測る。回転ヘラケズリは底部の $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{2}$ に及び、斜め外上方に伸びる受部から、ゆるやかに内傾するたちあがりを作っている。口唇部内面には、明瞭な段を有するものと、単に面をなすものの2種がある。また、受部とたちあがり基部の境界には凹線状のくぼみを有するものと、そうでないものの2種がある。第20図-11にはヘラ記号が施されている。第20図-10は、たちあがり基部の内面が明瞭に屈曲している。

第20図-18は、短脚1段の無蓋高坏である。脚部高5.7cm、脚端部径8.7cm、脚と坏部の接合部径4.4cm、坏部の稜径11.4cmを測る。脚部には円形のスカシ孔が3方に穿たれている。

第22図-1、2は器台の坏部と脚台部である。完全に接合する点が検出できなかったこと、

胎土が若干異なることから現時点では別個体として報告しておく。坏部の口径は、36.0cmを測り、深さは約11.5cmとやや浅い。脚台部高29.0cm、端部径25.5cm、接合部径約12.8cmを測る。脚台部には、最上部に小さな円孔が3方、その下部に三角形のスカシ孔が3段、3方に穿たれている。三角形のスカシ孔は上端部が丸みを帯びるものである。

第22図一3は通有の形状を持つ提瓶であるが、把手部分が円環となっており、比較的古い形態を留めている。

**玉類** 玉類は土坑2の埋土最上層と、その上部の中世包含層から出土している。総点数は約58で、内訳はガラス玉2、臼玉53+ $\alpha$ 、土玉1+ $\alpha$ である。第23図一1、2はガラス玉、第23図一9は土玉である。

### (3)まとめ

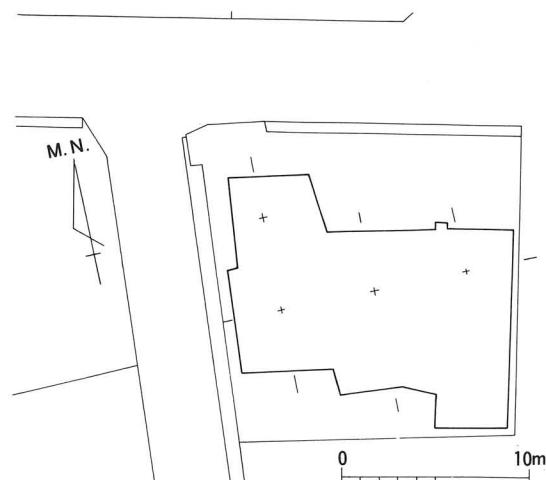
当該調査区で検出された遺構は、第19次調査地との関係で考えると、やはり桜井谷窯跡群から搬出された須恵器を集荷、選別する中継地点としての性格を新免遺跡が持っていることを如実に表している。また、出土した玉類からはその祭祀形態の一端がうかがえるが、須恵器生産に強い関連を持つ集落内と、一般集落内での祭祀形態が一様であったとは考え難いので、今後、類例との比較検討が必要と考えられる。

土坑2から出土した須恵器の時期は、蓋坏全体の形態、稜部や受部、口唇端部の丸みを帶びた形状、また坏身の口径が11~12cmに集中することなどから、陶邑のMT-15型式に併行する時期であると考えてよかろう。ただし、この段階の蓋坏としては細部形態に前段階の特徴を色濃く残しており、桜井谷窯跡群で生産される須恵器の特色として捉えられるものである。

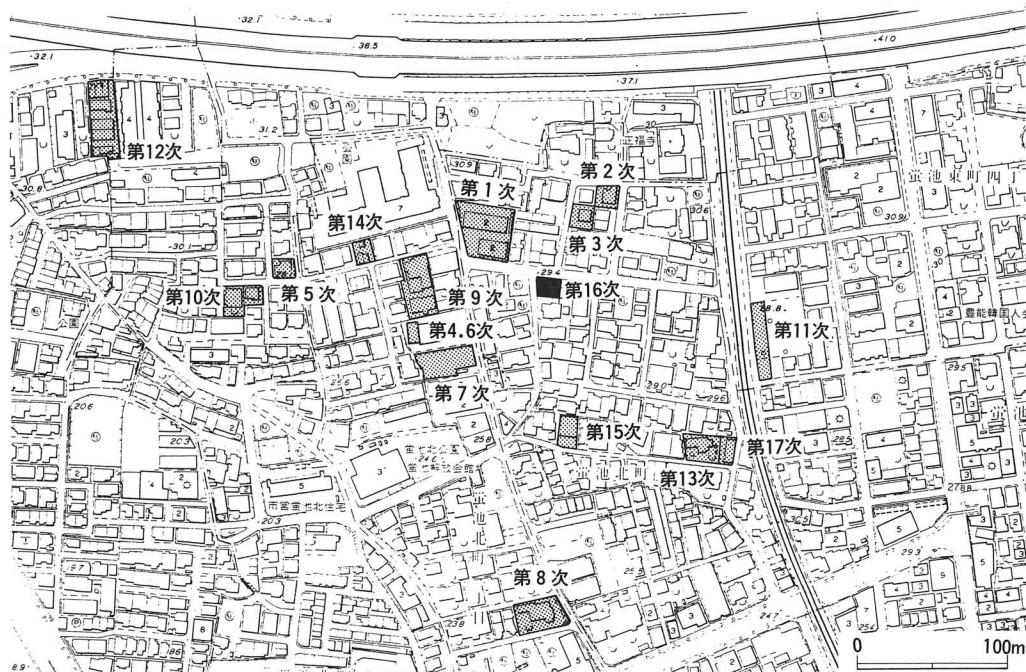
## 第V章 萤池北遺跡第16次調査の概要

### 1. 調査の経緯

調査地は、萤池北町1丁目115-1・2、110-1に所在する。今回、個人住宅兼共同住宅の建築申請に基づき、立会調査を行ったところ遺構が検出された。この調査結果に基づき協議を行ったところ、建築工事着工前に、9月16日から10月13日の日程で、建物の基礎掘削範囲である 122m<sup>2</sup>について本調査を行うこととなった。



第24図 調査地範囲図 (1/400)



第25図 調査地位置図 (1/5000)

## 2. 調査の概要

### (1) 基本層序

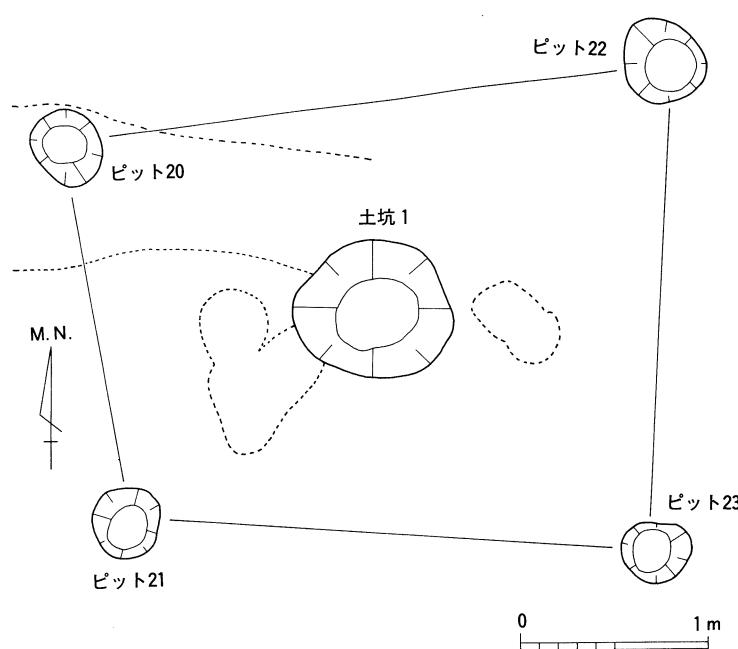
当調査地内の全面にわたって、地表より耕土、床土、黄褐色粘質土及び褐色粘質土、黄橙色粘質土の順で堆積していた。このうち、黄褐色粘質土及び褐色粘質土は、古代後期から中世後期まで遺物が出土する中世期の遺物包含層である。なお、遺構は、現地表面から45cm下の黄褐色粘質土層直上にて検出した。

### (2) 検出した遺構と出土遺物

当調査区からは、ピット23基、溝4条、土坑2基を検出した。このうち、ピット4基と土坑1基は住居1に伴うものである。また、ピット6・11・12・13・18より柱痕を検出しているが、建物を復元することはできなかった。以下、住居1について概要を記す。

**住居1** 調査区中央部にて、ピット20～24の4基の柱穴と炉と推定される土坑1からなる堅穴住居を検出した(第26図)。ただ、住居は後世の著しい削平をうけて、上面及び周溝が消滅しており規模、形態は明確ではない。

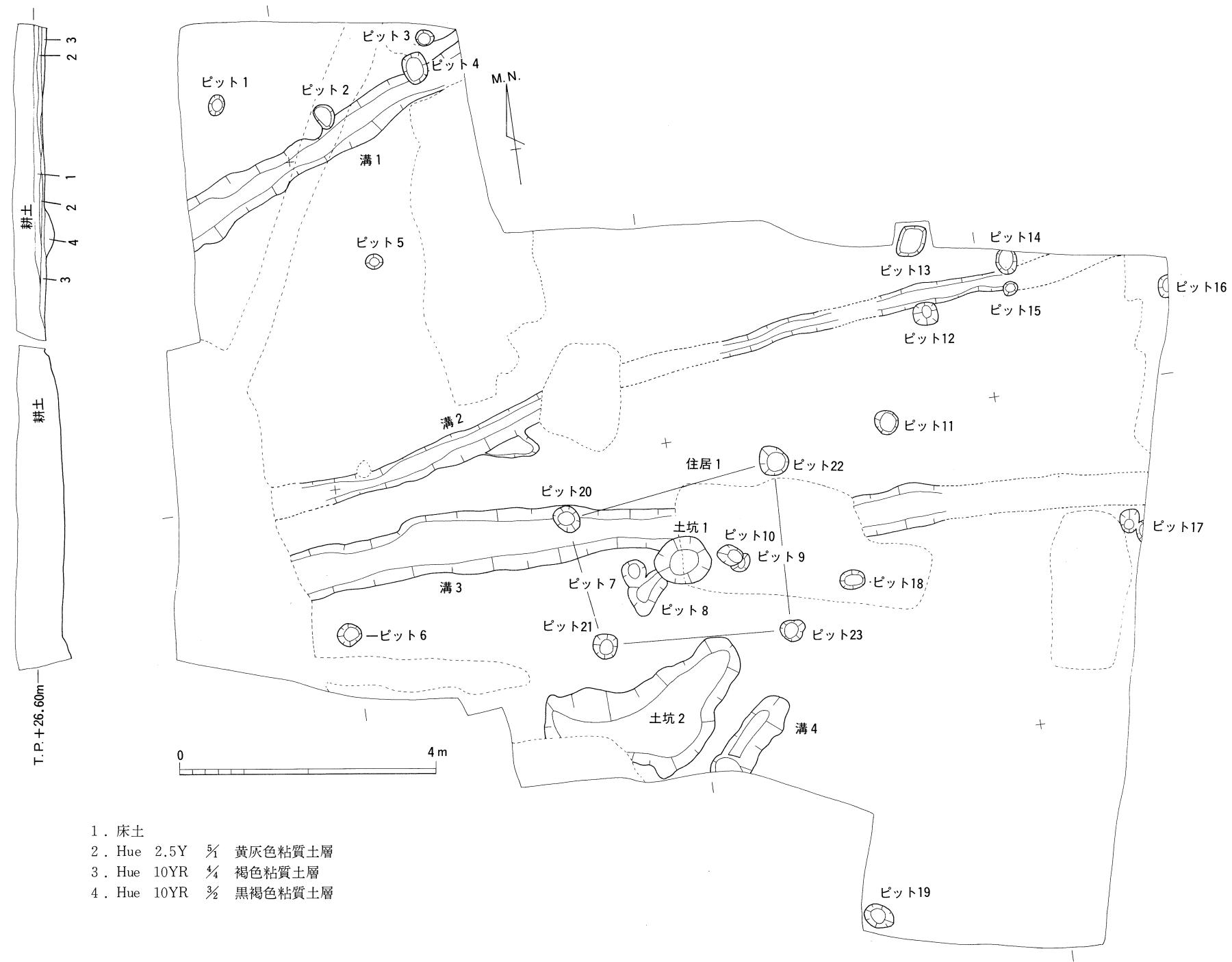
柱穴の直径は平均約25cm、深さは平均40cmをはかる。柱穴埋土の土層観察から、柱径は平均約15cm程度と推定できる。柱穴の平面配置をみると、東西長が最大で3.2m、南北長が最大で2.7mをはかる。柱穴の配置からみて、おおよそ直径5m前後の円形若しくは1辺5m前後の方



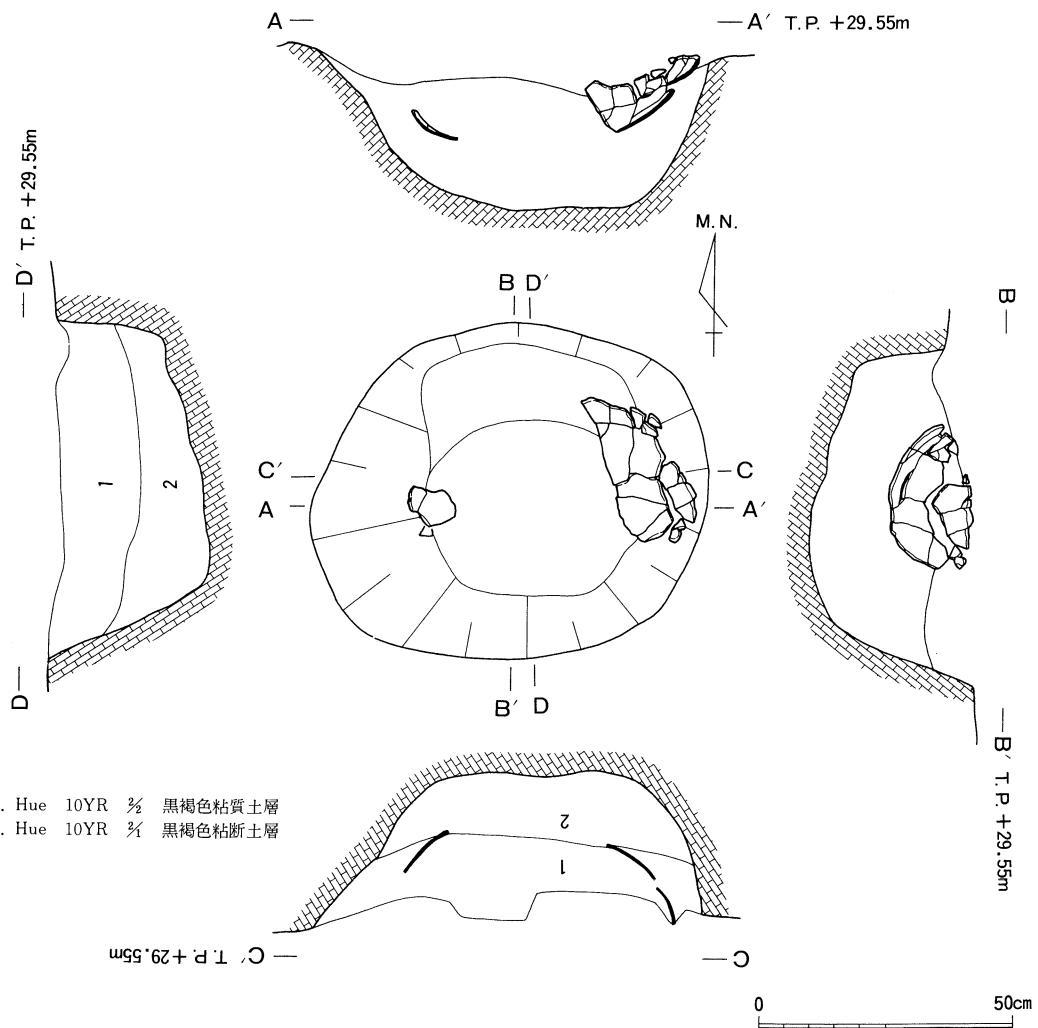
形の堅穴住居を想定することができる。

土坑1は住居中央に配置されていた炉と推定できる。土坑1は南北約68cm、東西約80cm、深さ約36cmをはかる橢円形の土坑である。土坑埋土は黒褐色を基調とする上下2層に分離できる。第28図土層1に相当する上層から、弥生土器が少量出土している。土層2である

第26図 住居1平面図 (1/40)



第27図 調査区平面図 (1/80)

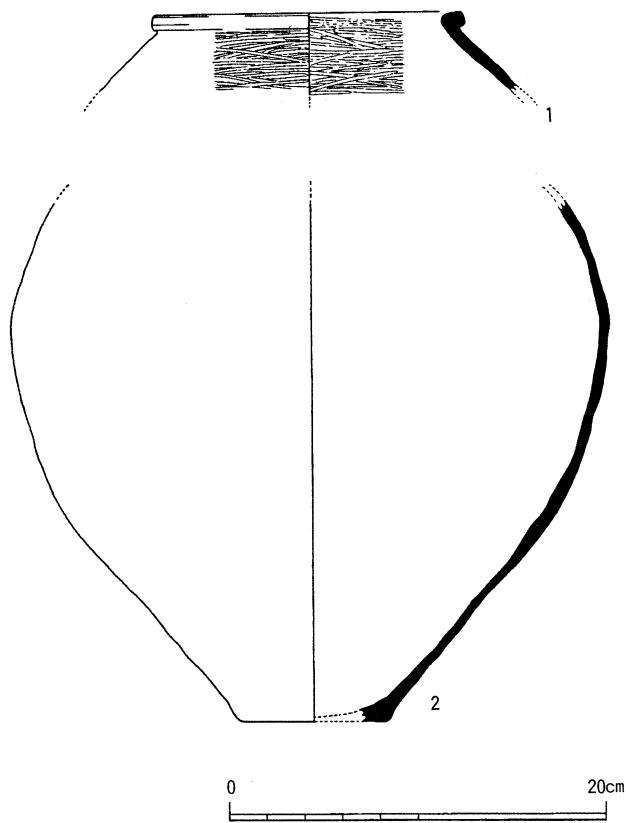


第28図 土坑1平面・断面・立面図 (1/15)

下層埋土は、遺物は含まないが炭を多く含む。なお、第29図2の甕は、上層と下層の境界部分において転倒した状態で出土したものである。

土坑から出土した遺物の多くは細片であり、図化し得た遺物は第29図の2点に限られる。このうち、1は上層埋土中から出土したもので、2は先に述べたとおり上層と下層の境界部分にて転倒した状態で出土したものである。

1は無頸壺の口縁部から体部上半である。口径は、推定16.4cmをはかる。口縁部には施文等を施さず、体部内外面はともにヘラミガキを施す。2は、甕体部である。残存部分の最大径は推定31.6cm、底部は推定 8.0cmをはかる。器壁の摩滅が著しく、体部上半の外面において斜方向のハケ調整を行う以外は明瞭ではない。土坑1出土遺物の特徴より時期を明確にするには十



第29図 土坑1出土遺物 (1/4)

ところで、螢池北遺跡は弥生時代中期の大規模な方形周溝墓が発見されたことによって、千里丘陵中位段丘上に位置する拠点集落として知られている。しかし、今回の調査を含め17次にわたる調査の成果を見ると、大規模な方形周溝墓群を検出したこと以外に、拠点集落と想定し得る遺構群などは未だに発見されていない。また、仮に今後の調査で遺構が集中して検出されることがあっても、方形周溝墓群に対応する規模の集落が成立するだけの余地が、螢池北遺跡の範囲の中で残されているのか、という疑問が生じる。無論、この状況は豊中市域の範囲におけるものであるが、池田市側(宮の前遺跡)でも同様の状況であることが既に指摘されている。<sup>(※1)</sup> 池田市側では、方形周溝墓が台地縁辺部に、少なくとも二群以上の住居群が台地中央に存在していると言われており、拠点集落が池田市側にある可能性も極めて低いと考えられる。現時点では螢池北遺跡に拠点集落が存在する可能性を否定するにはいたらないが、小集落の集合と累積によって成立した可能性も含め、今後は螢池北遺跡の位置付けについて改めて検討する必要も提起されよう。

分ではないが、弥生時代中期後半と考えられる。

### (3)まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の住居をはじめ、多数の遺構を検出した。このうち、住居1は、当調査地の南東に広がると推定される弥生集落の一部となる可能性はあるが、付近に関連する遺構や住居の分布は認められないことから、短期間のうちに廃絶したものと考えられる。このような関連遺構もなく短期間で消滅する住居1は、ある程度の期間継続した大規模な集落の一部と考えるより、むしろ散発的な小集落の一部と想定した方が適当かもしれない。

(※1) 田上 雅則 『池田市埋蔵文化財発掘調査概報 1988年度』池田市教育委員会 1989

## 第VI章 金寺山廃寺第4次試掘調査の概要

### 1. 調査の経緯

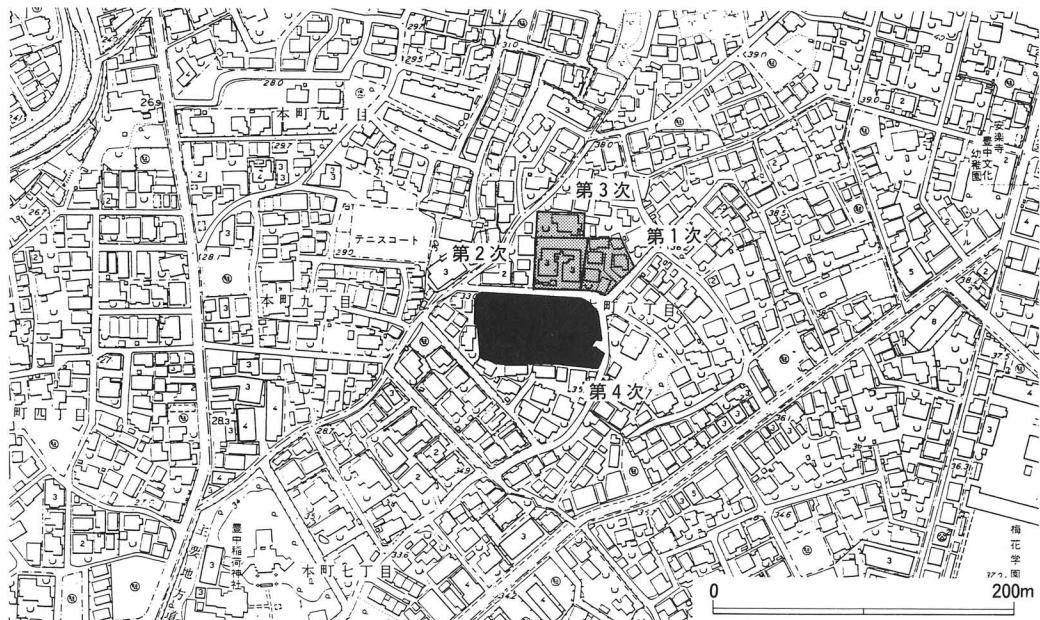
試掘調査の地点は、豊中市本町8丁目31,31-1・2番地である。今回、土地所有者から開発に伴う事前相談を受けたが、当地北側には今まで3度の調査を実施してきた金寺山廃寺が存在する。しかし明確に寺院の伽藍配置や寺域を確定できる状況にはいたっていなく、南側に隣接する当地においても寺域内に当たることが想定され、既往の調査とその重要性を説明し、協議を行った。

その結果、開発面積が広いこともあり、まず重機掘削による確認を第1段階とし、明確にできない場合は人力掘削による精査を行い、判断するという方法を用いた。

なお、試掘調査は重要な遺構等が検出された場合、保存等を協議するという前提で実施したものである。開発面積は約6300m<sup>2</sup>で試掘調査面積は222m<sup>2</sup>である。

### 2. 既往の調査

今回の試掘調査の結果を報告する前に金寺山廃寺の概要と既往の調査の状況について簡単にふれておく。



第30図 調査地位置図

江戸時代文化10年（1813）前後に北側の旧新免1268番地、現在の本町8丁目122番地から塔心礎が発見されている。それは本町3丁目の看景寺に搬び込まれ、現在も遺存している（府指定文化財）。その時の状況は看景寺が所蔵する「金寺礎石銘并序」によってうかがうことができる。それによると発見された付近は「塔岡」と称していたようであるが、昭和初年には小字金寺山と呼ばれ、多くの古瓦が散乱していたと『飛鳥時代寺院址の研究』では報告されている。

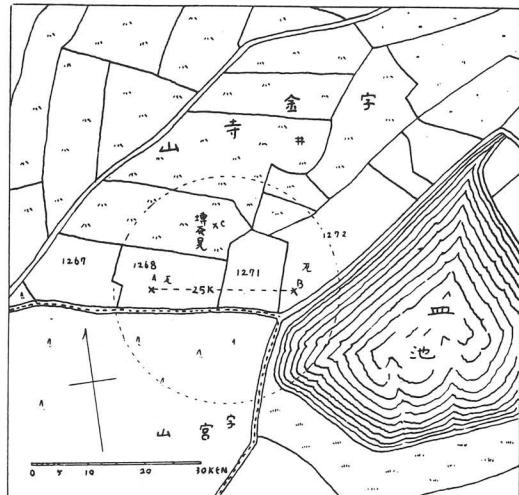
この寺院の古瓦は豊中中学（現豊中高校）や藤沢一夫氏等により採集され、上記の書物や『豊中市史』等で紹介されている。その古瓦をみると飛鳥山田寺系の軒丸瓦と重弧文の軒平瓦の組合せで始まり、平安時代の初期までを含むもので、最後は火災により焼失したものと推定され、瓦が二次焼成を受けている。

このような状況の中で、初めて発掘調査を実施したのは1978年の開発に伴うもので、本町8丁目121番地である。多くの瓦類が出土するも損壊が激しく排水用の暗渠等に再利用されているものが多く、明確な遺構などはほとんど検出されていないが、一部掘立柱建物跡は検出されている。

2次調査は1次調査の西側122番地を1983年に開発に伴って実施したが、ここでも損壊が激しく、遺構検出面まではすべて搅乱土であった。これは1次調査でもいえることで、この付近が元来孟宗竹やぶであり、土入れ、土取りが繰り返されていることによるものとみられる。検出した遺構は掘立柱建物跡で創



第31図 金寺山廃寺塔心礎



第32図 金寺山廃寺付近地籍図（『飛鳥時代寺院址の研究』より）



第33図 金寺山廃寺第1次調査

建時のものではなく奈良時代後期から平安時代初期のものとみられる。第3次調査は2次調査の北側に隣接した118番地で実施した試掘調査である。3次調査は個人住宅の建替えに伴って行った確認調査である。したがって瓦類が出土する上面で止めていたため遺構等は明確ではない。建物はそれらを損なわない上部で建築された。

以上のように既往の調査において、損壊が激しいことも手伝って、明確な伽藍等は検出しておらず、配置等は残念ながら不明である。

### 3. 試掘調査の概要

#### (1) 基本層序

基本的には第1層表土、第2層黄褐色粘質土、第3層褐色系粘質土（包含層）であるが、当地も既往の調査と同様、多くの削平を受けしており、純粹な堆積状況は極一部に認められるだけである。多くは何回かの盛土と搅乱を受け、地山上面まで盛土である所がほとんどであり、地山も旧来の状況を呈しているとは認めがたい。一部第1トレーニングの西斜面では流出土が堆積し、遺物が出土する土層が認められる程である。したがって2次、3次改変を受けており、堆積状況は良好ではない。

#### (2) 検出遺構

検出した遺構は土壙状遺構、溝、土壙墓状遺構等である。しかし遺構は希薄で散漫な状況であることがうかがわれる。

#### 第1トレーニング

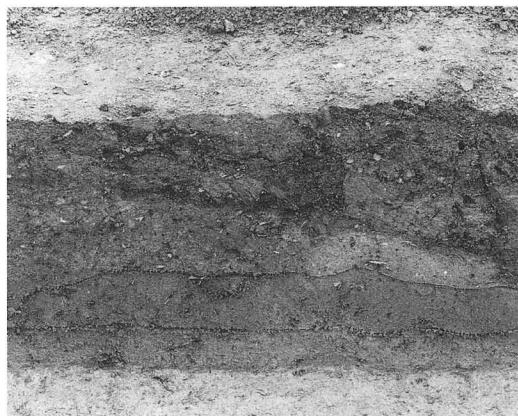
木の根等の腐朽したものが多く、遺構と思われるものは、ほぼ中央の南壁で検出した土



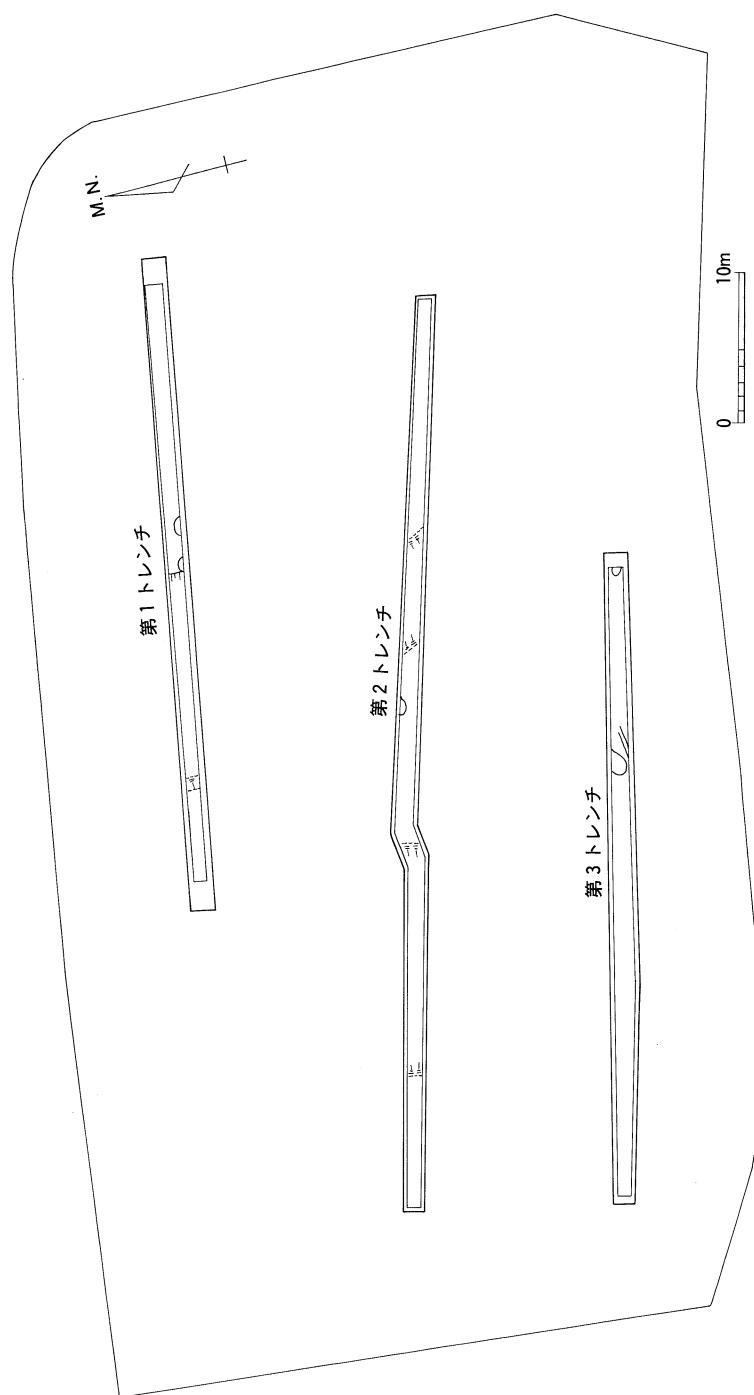
第34図 金寺山廃寺第2次調査



第35図 金寺山廃寺第3次調査



第36図 堆積土の状況



第37図 試堀調査範囲図



第38図 第1トレンチ-北壁断面図 (1/80)

壙状の物である（第39図）。東西に並んで2個検出したが双方とも攪乱で切られ、そのうえ南壁に入り込むため、大きさは定かにしがたい。現存の東西径は80cm以上、深さは30~40cmあり、柱穴の掘り方になると大型の建物が想定されるが明確にはできない。

### 第2トレンチ

トレンチのほぼ中央で北壁にかかる土壙状の遺構を1個、検出したのみである。東西径1m、深さ約10cmで遺構かどうか明確にはできない。

### 第3トレンチ

トレンチの中央よりやや東側と東端において溝、土壙墓状遺構、土壙状遺構を検出した。溝は幅約20cm、深さ2~3cmでわずかしか残存していなかった。溝内より磁器の細片が出土している。

土壙墓状遺構は溝の北側で検出したものである。長軸を北東から南西にとり、半分以上が北側に入り込む。平面形は長方形を呈することから土壙墓の可能性が高いものとみられる。短径は約80cm、長径は1m以上で、深さは10cm程度である。

土壙状遺構は東端で検出したものであるが、これは東壁内に入り込んでいる。不定形な円を呈し、長径70cm以上、短径65cm、深さ10~15cmを計る。柱穴の可能性も考えられるが残存状態が浅いため柱痕等の確認はできなかった。

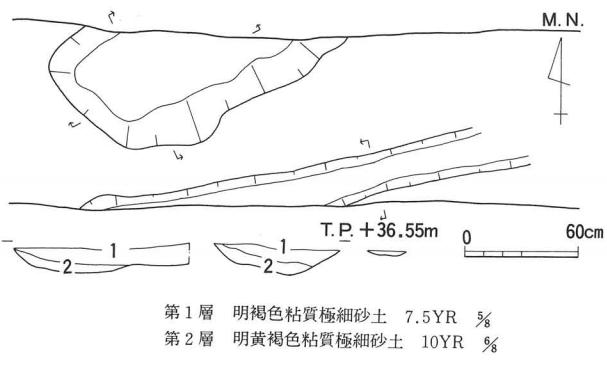
### (3) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少量でそのほとんどが第1トレンチである。瓦片が主なものであるが、他にも須恵器、土師器、陶器、磁器等の破片が出土している。

1は細弁蓮花文軒丸瓦で弁数は16葉になるものである。色調は灰色を呈し焼成は良好なものである。弁の表面には範型の刻目が斜格子状に認められる。2・3・4は平瓦で、そのうち2・3は裏面に斜格子の叩目、表面に細かい布目を残すもので金寺山廃寺の創建期の平瓦に比定



第39図 第1トレンチ遺構検出状況



第40図 第3トレンチ平面・断面図

されているものである。なおこの斜格子の平瓦は2種類があり、斜格子の中に珠文が施されるものと、2・3のようないものとがある。4は表面がやや粗い布目、裏面は縄目を施している。5・6は丸瓦で、表面は両方とも平滑に仕上げられている。

裏面は5が細かい布目に對し、6は縦方向のヘラ削りが施されている。焼成は5が灰色で硬く、6は淡灰黄色を呈し、軟質気味である。

7はミニチュアの躰である。現存高は7.7cmで、体部径は4.8cmである。底部外面にヘラでバツ印が施されている。体部に1条、頸部に2条の簡略化した沈線を施している。

出土はすべて第1トレンチで、1～6が斜面の流出土（包含層）、7は盛土からである。

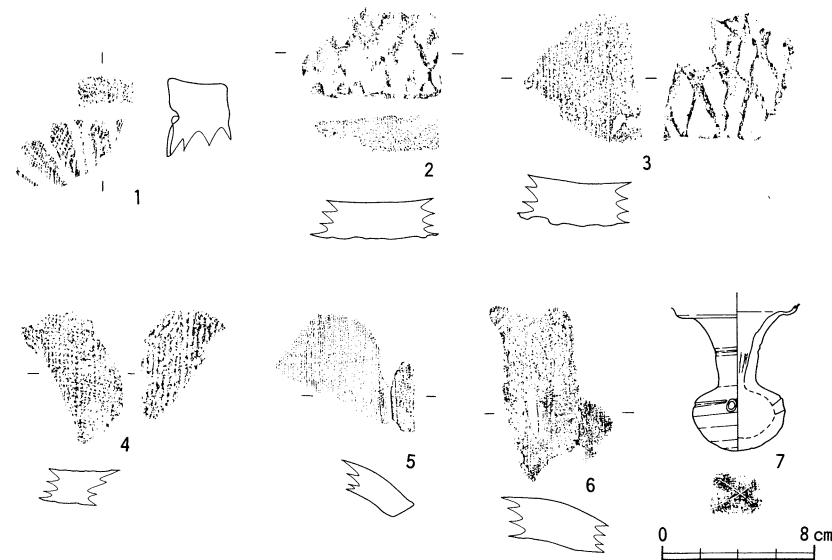
#### 4. まとめ

今回の調査で東西方向に3本のトレンチを設定し、精査を行った。その結果、既往の調査と同様、多くの手が入り損壊が著しい。したがって堆積土も乱れている所が大部分である。

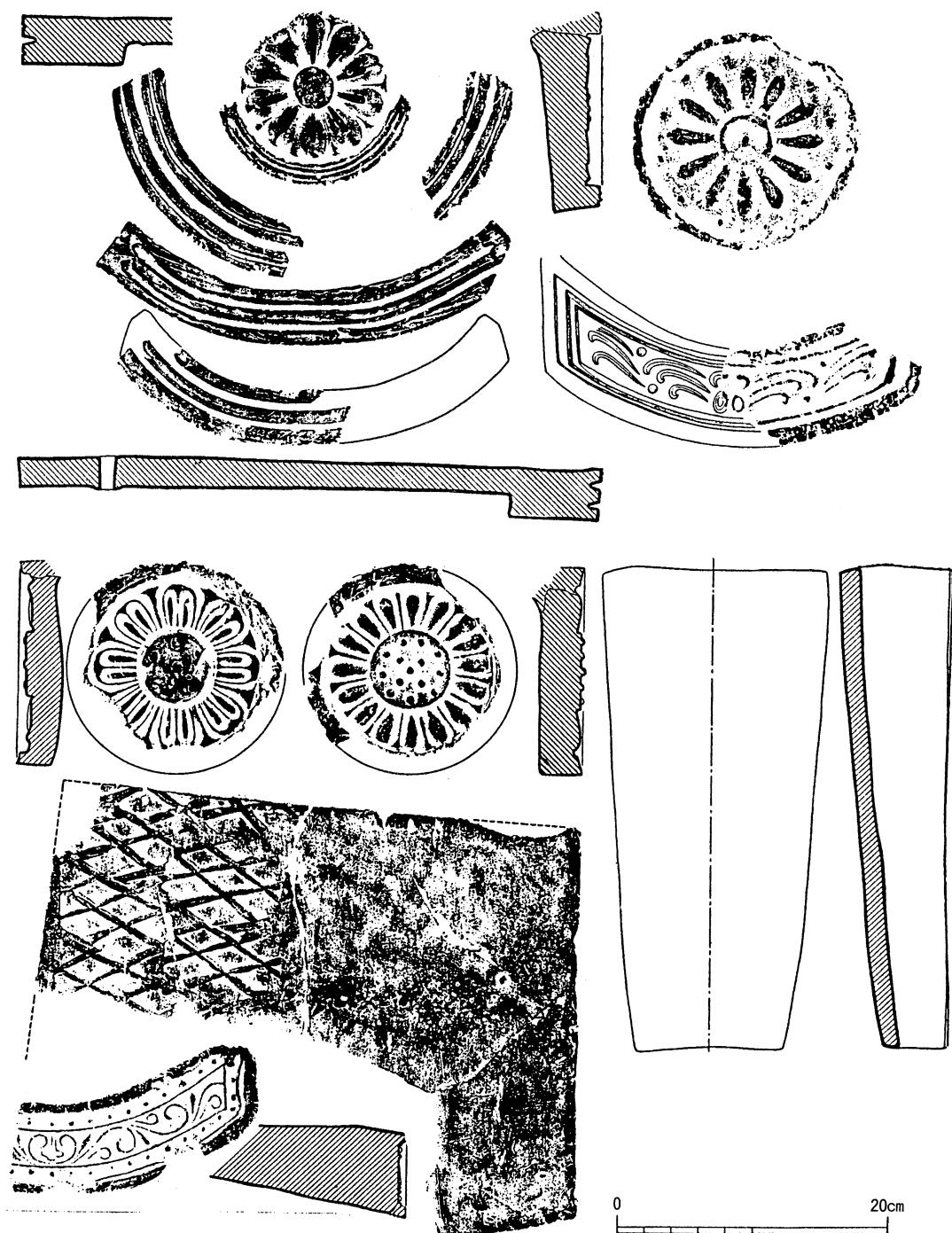
しかし各トレンチにおいて遺構密度は希薄なもの、遺構は少ないながらも存在する。トレンチ幅が狭いため、その性格は明確にできないものの、出土遺物等からみて金寺山廃寺に関連する遺構とみるのが妥当である。

また第3トレンチにおいて土壙墓状の遺構が存在し、第1次調査においても金環と須恵器が出土した同様の土壙墓が検出されている。このことはこの寺院の南側に所在する新免宮山古墳に継続する6世紀代の古墳群が存在していることを予測させる。したがって、今回検出した遺構は6世紀代の古墳群の存在と金寺山廃寺に関連する二時期の遺構としてみることができる。

いずれ本格的な調査が実施されれば、その性格も明確になるであろう。



第41図 出土遺物 (1/4)



第42図 金寺山廃寺出土瓦（『豊中市史』より転写）

# 図 版



(1) 調査前風景



(2) 調査区全景



(1) ピット1土層断面



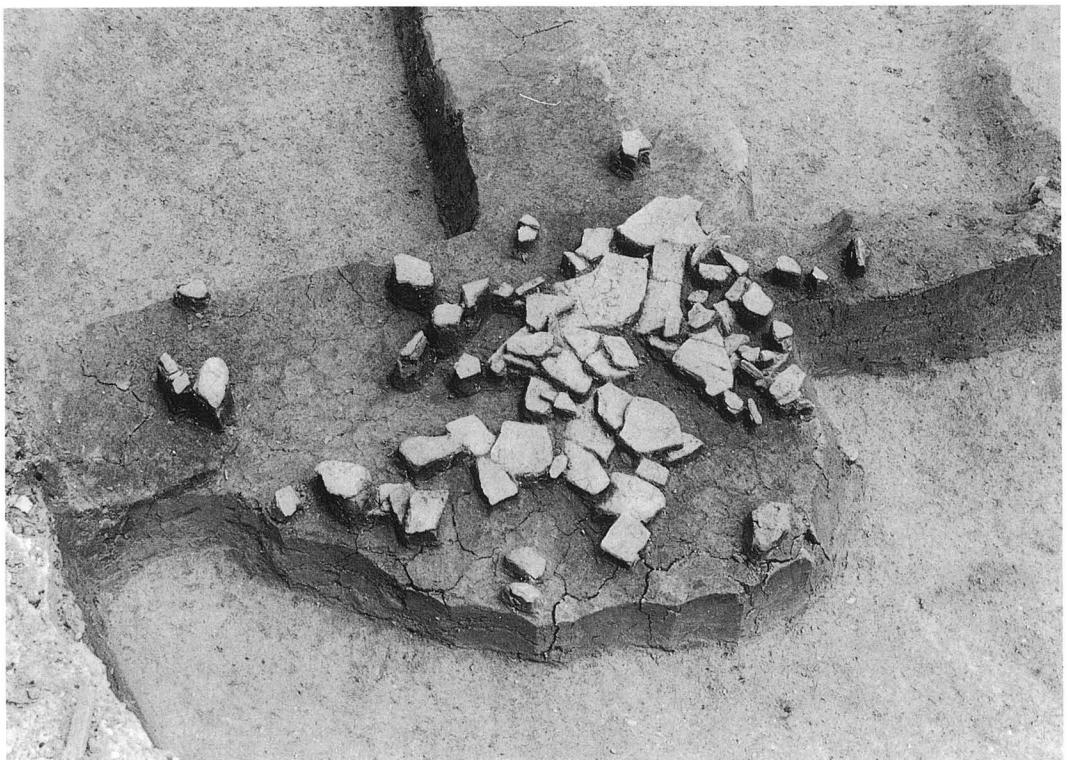
(2) 河川土層断面



(1) 調査前風景



(2) 調査区全景



(1) 周濠1埴輪出土状況



(2) 周濠1全景



(1) 周濠 2 墓輪出土状況



(2) 周濠 2 全景



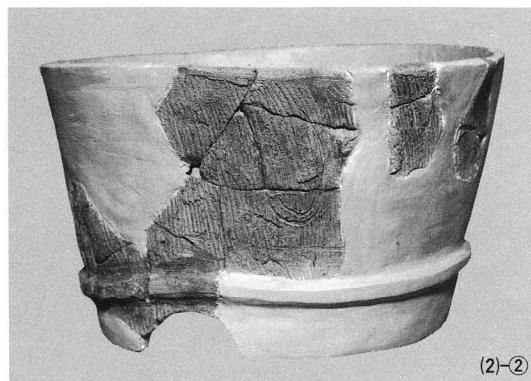
(1) 周濠1出土朝顔形埴輪(第13図)



(2)-①



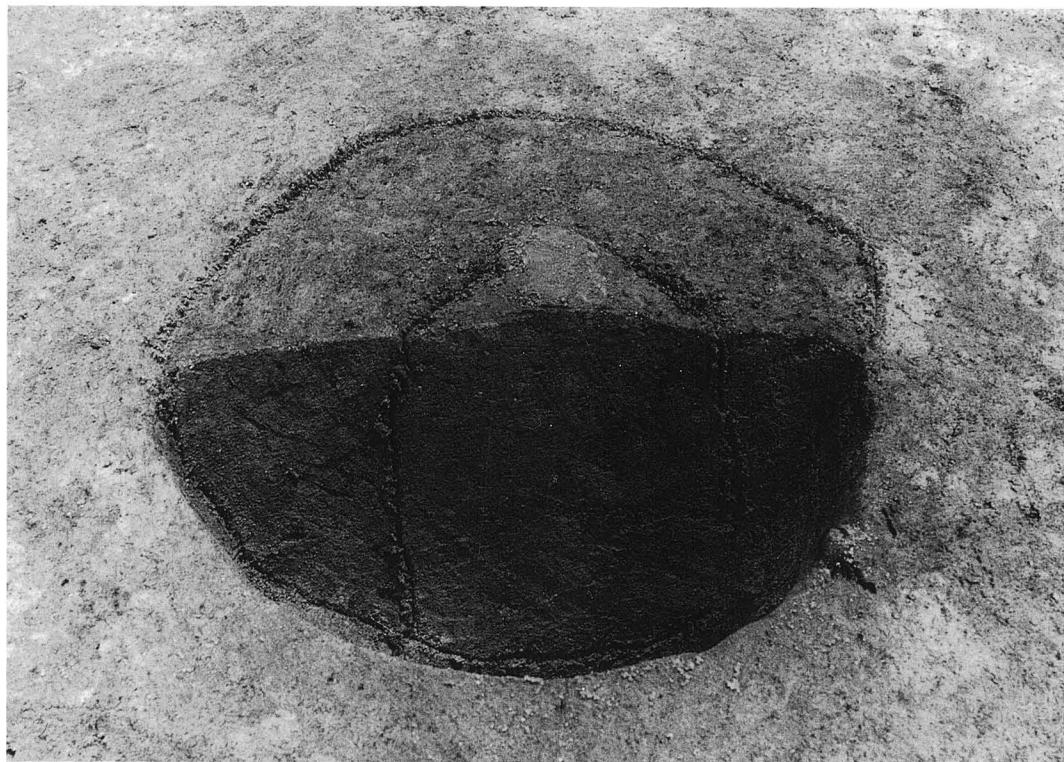
(2)-③



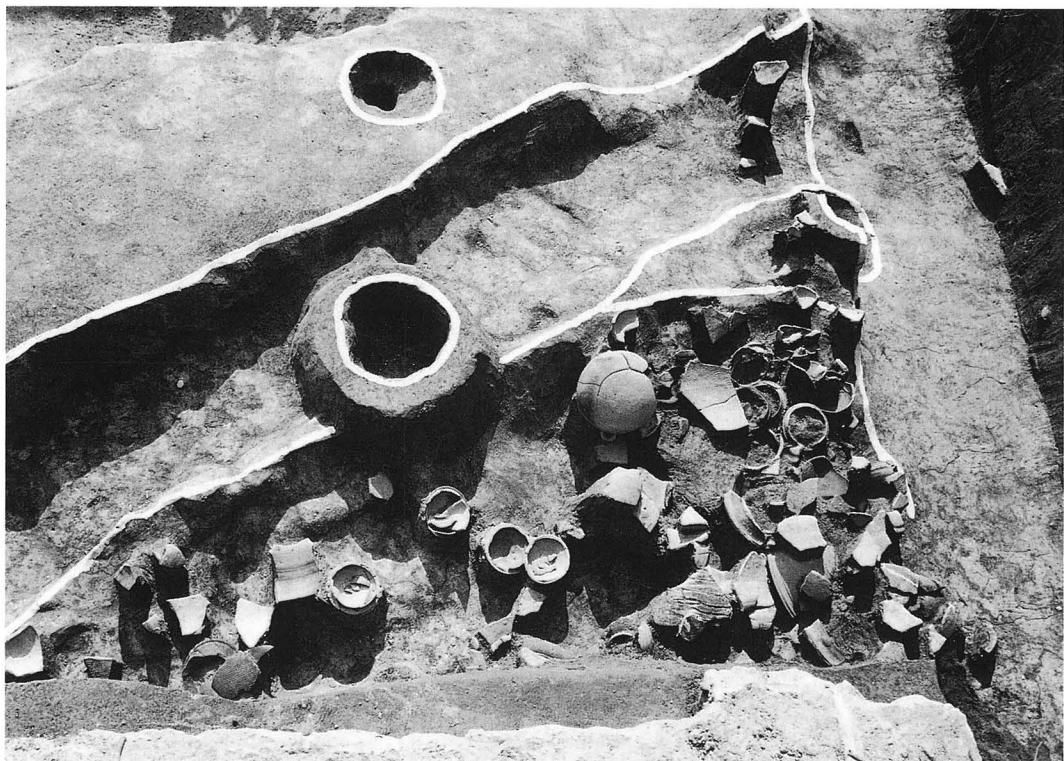
(2)-②

{①、第15図1 ②、第15図2 ③、第15図4}

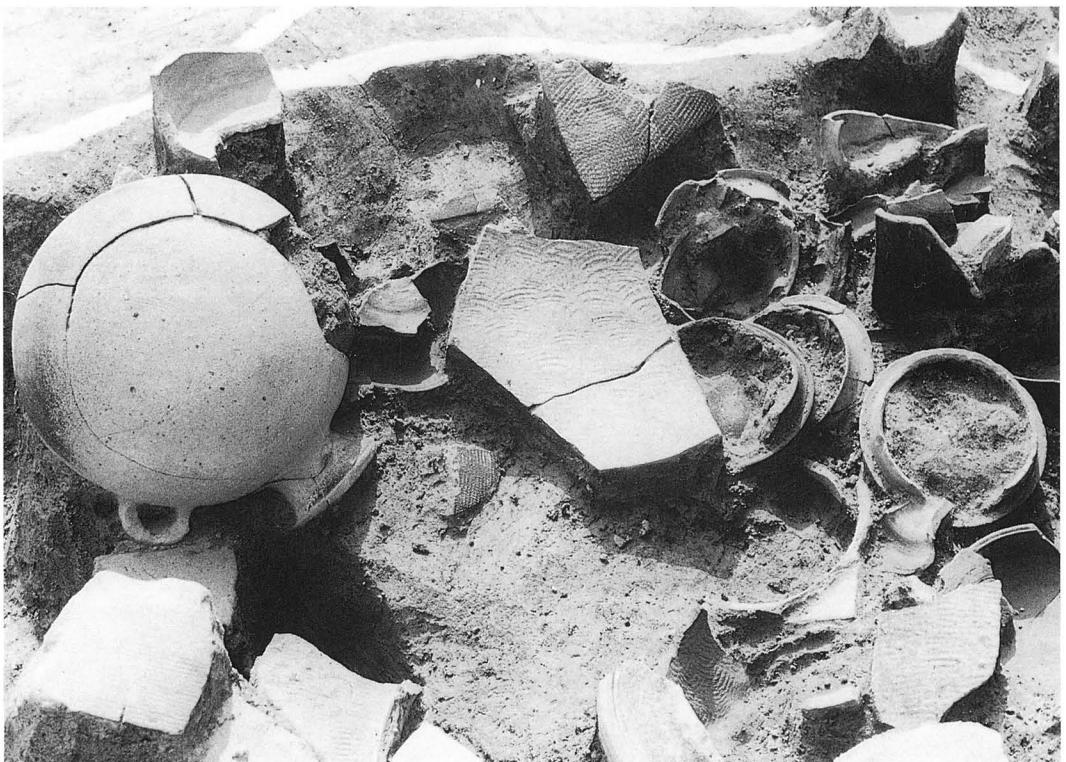
(2) 周濠2出土円筒埴輪



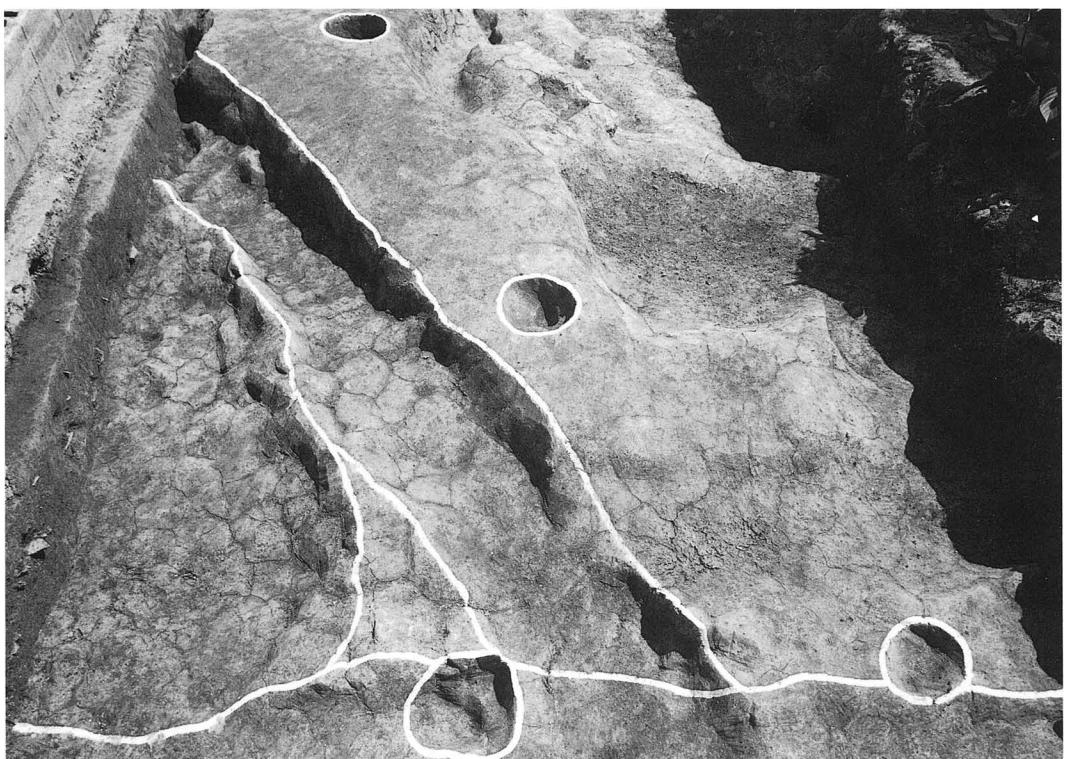
(1) ピット 5 断面（西から）



(2) 土坑 2 遺物出土状況全景（東から）

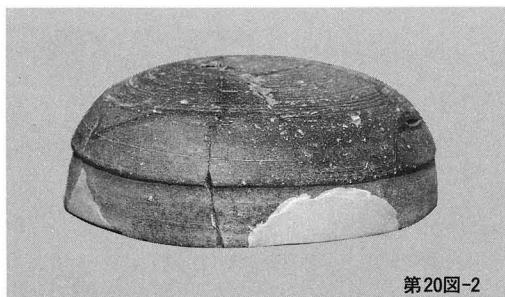


(1) 土坑2遺物出土状況近景（東から）

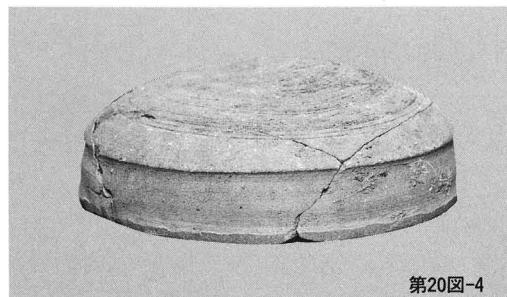


(2) 遺構完掘状況全貌（北から）

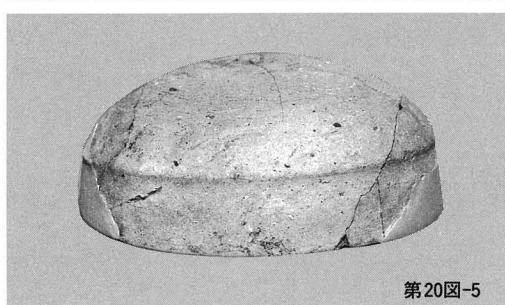
図版9 新免遺跡第42次調査地出土遺物



第20図-2



第20図-4



第20図-5



第20図-6



第20図-10



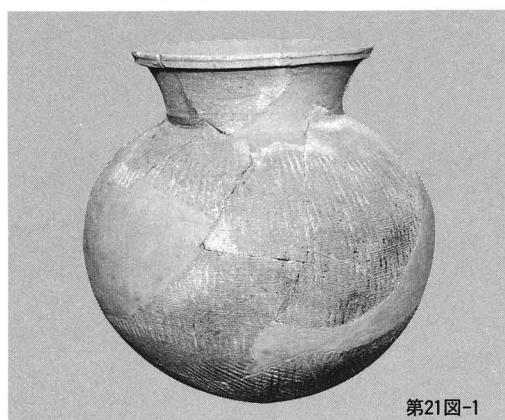
第20図-12



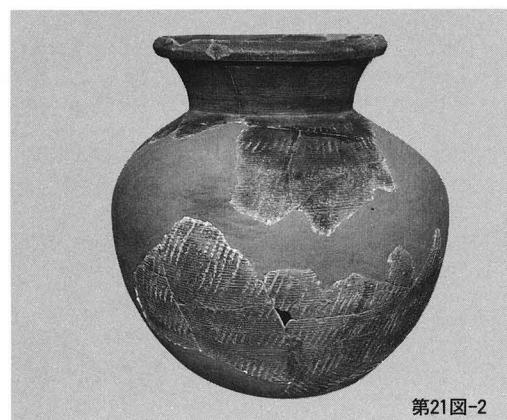
第20図-14



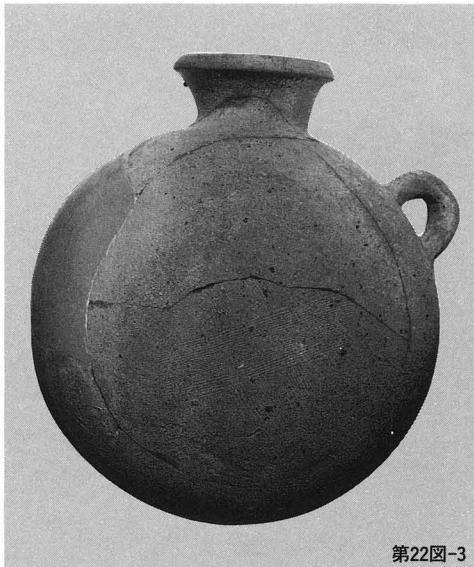
第20図-15



第21図-1



第21図-2



第22図-3



第22図-1



第22図-2

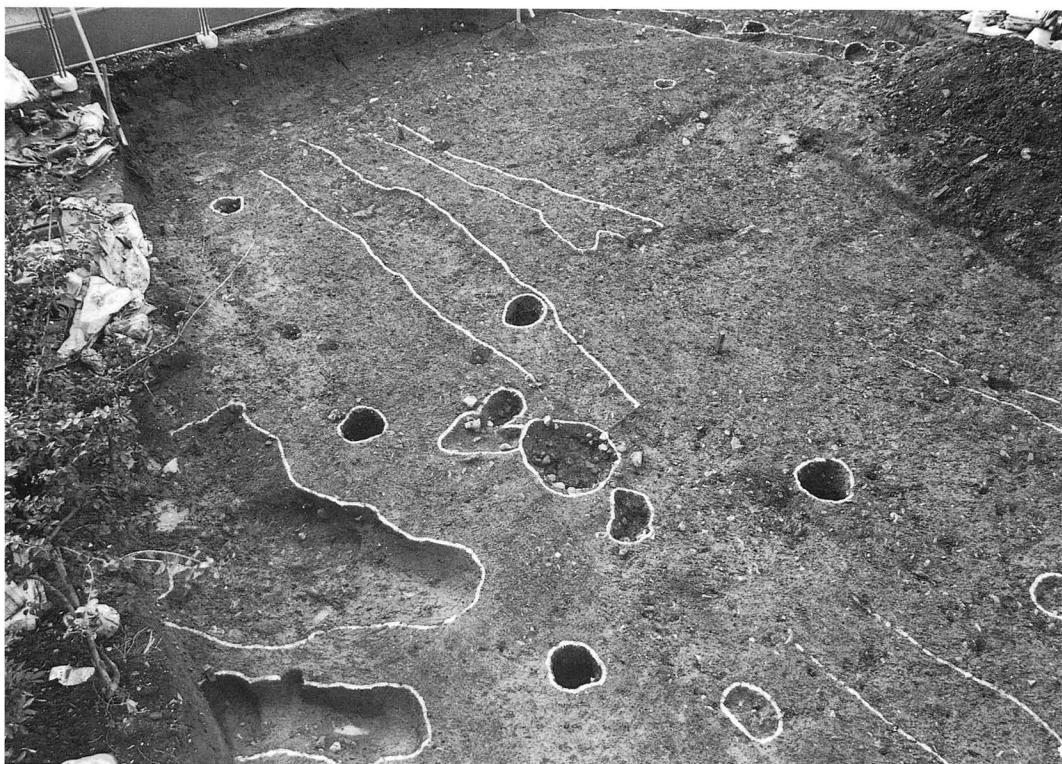


第20図-18

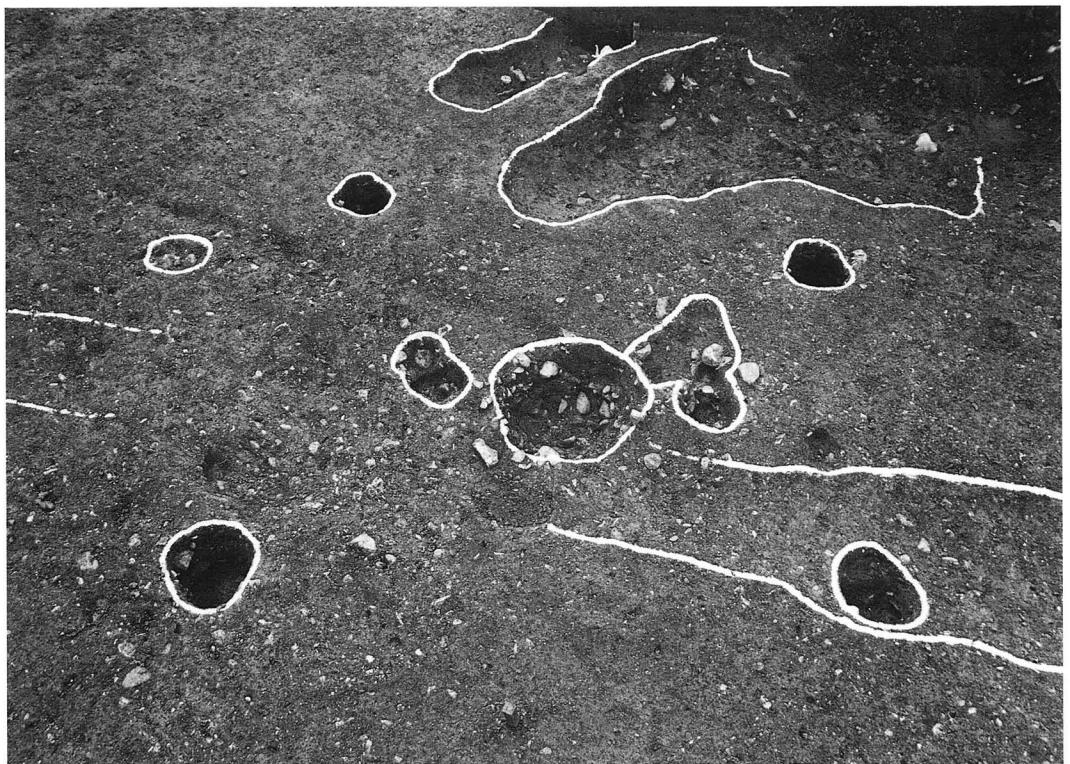




(1) 調査前風景



(2) 調査区全景



(1) 住居1全貌



(2) 土坑1土器出土状況



(1) 試掘調査の状況（第1トレンチ、第2トレンチ）



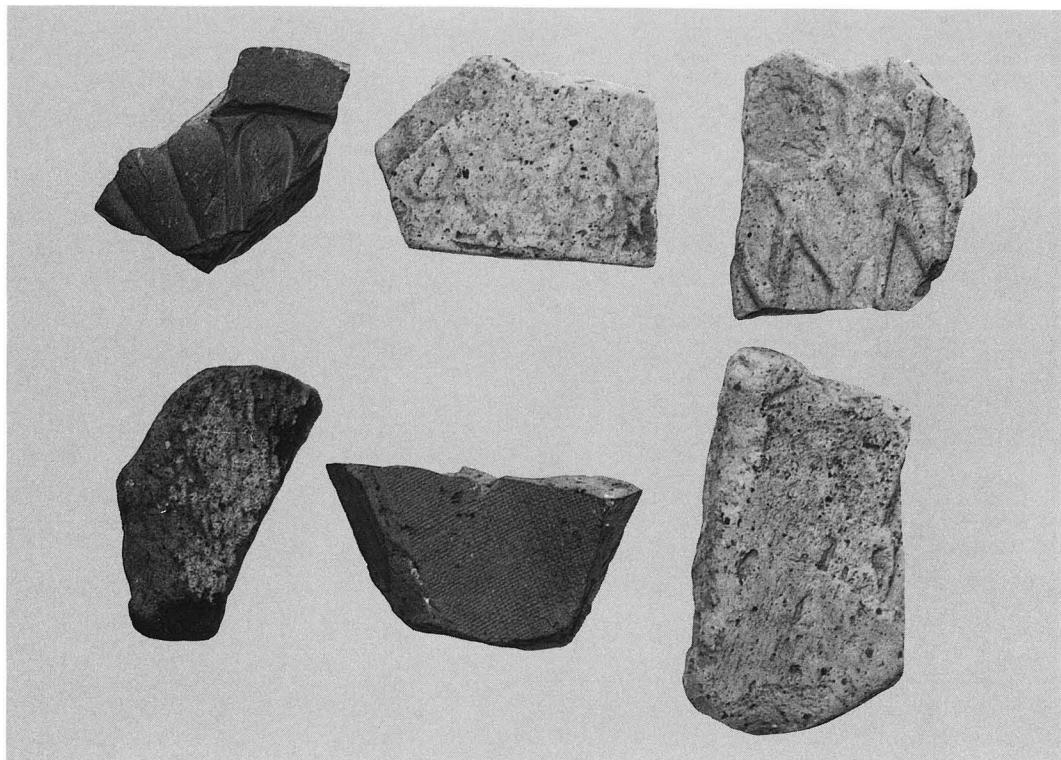
(2) 試掘調査の状況（第2トレンチ、第3トレンチ）



(一) 第一トレンチ遺構検出状況



(二) 第二トレンチ遺構検出状況



(1) 瓦類



(2) 魚

豊中市文化財調査報告第33集  
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1993（平成5）年3月

発行 豊中市教育委員会  
豊中市中桜塚3丁目1-1  
編集 社会教育課文化財保護係  
印刷 大和写真工業株式会社